WILSON
1.c4
Oct 1894
no 403

明治十八年初刊

女學雜誌

毎月末一回發兌

第四百三號

社說
大日本起てり
太淸の義人に告ぐ

隨感
美のおもて
風流の音
吾兒に人生を憶ふ
戸内の罵聲
艱難のよろこび
情を讀むの學
人世些觀（懲下微笑）
聾耳錄（默吟生）

女學
東西女學比觀
一、道理は易し適用は難し
二、ホームの區域東西相異の事
女生鬱散錄

評論
透谷集を讀む●德川光圀●紅葉の紫●民友社の日淸軍記●德川政教考●日本學制論

爛煥
博物館を觀るの記（無光）
朝鮮宗教の將來（布川靜淵）
悲しむ人（白衣子）
縱琴行（朝菌生）
高橋傳五郎を憶ふ（川合信水）
小さき手帳（日本の一學生）
傳道者たりし以前の高橋傳五郎君
樹玉集（泡鳴子）
婦人化粧の卷（山田美妙評）
捕虜の護送を視る（無名子）

片々

明治二十七年十月二十七日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌月刊に改むるの辭

明治十八年初めて女學雜誌を刊行してより、少くとも月二回、多きときは月五回の發兌を爲しぬ。凡そ現在雜誌數百種ありと雖ども、毎週の出版を爲すものは、兩手の指を屈なふに過ぎず。然るに、女學雜誌は、其齢ひ尤とも老るくして、而も尚ほ此異數者の中に列し、毎週頻發の榮に預かり來れるは、單に愛顧の知己多くして讀者が之を棄てざるの致す所なり。當に彌よ發奮して知遇の恩に酬ふべきに、今ま俄然として最少の數にひそみ、今后、僅かに月一回の發兌となさんとするは、眞とに已むを得ざるものあるが故なり。

編者は、近時、日本人が海外傳道に着手す可き聖機の到來したることを認識し、其の將來に於ける大國是たる可きことを確信し、之が爲めに力を盡すこと極めて必要なる所以を感覺せしかば、數ヶ月前來、大ひに同志と相謀る所ろのものありき。然るに、天運到來し、國家大ひに動き、忽然として帝師外に正義を主張するの機會又顯現したるが故に、吾儕が所慨彌よ切迫し、責を感ずるの一層洪大なることを覺ゆるに至りたり。

此に於てか、編者は同志の驥尾に附し、此の精神實行の爲めに大ひに力を盡さんことを決したり。爲めに時を要し、力を要し、亦た四方周流の暇を要すること多からんとす、故に豫かじめ先づ女學雜誌の割愛を要めざるを得ざる也。

凡そ、十年の舊事業は、たゞならぬ情愛を生ずるもの也。編者が女子教育に於ける即はち是れ也。編者は、從來幾多の事に於て先蹤の後塵を追へり、精神の發動せる所ろ、必らずしも、所云る女子教育其事のみにはあらずと雖ども、主として其の一身を許與したる所ろのものは、即はち女子教育の道なりき。女學雜誌が、社會万般の事に同情を表せんとするに拘はらず、儼然、題して女學の雜誌と號するものは即はち此の由縁なり。

然るに、編者は、今后凡そ二年を期して、日本人海外傳道の事業の發企の爲めに、其の多くの力を獻けんとす。女子教育專門の事業よりして此事を見れば、縁故太はだ近からざるが如く、吾が十年の舊知己は、此一點に於て編者が操を動かしたるかを奇しまるゝことなきにあらじ。然れども、編者は、東洋に立てる大日本の天職を念ひ、宗教的東方問題の益す切迫することを感じ、國民對外思想の靈洗を受けざる可らざることを認ため國內教勢の大ひに革新せざる可らざることを信じては、大日本海外傳道の事業の、極めて緊要、極めて有益なることを覺悟し、此が爲めに編者が小身を獻ずることの太はだ感謝すべきことを念ひ、十年の舊知己は、情想必らず悟徹して、終に編者が眞衷の在る所ろを察了せらるべしと信じ、即はち敢て不安の想なきことを得るもの也。

況んや、編者が女子教育に於ける、到底全く因縁を絶つこと能はず。更に所云る「女學」なるものに對するに至ては、一生の小抱負固より之を壓滅することを得ず。更に況んや、多年の同人既に少なしとせず、皆な相助けて女子教育の道を彌よ發揮せられんとするものあるに於てをや。故に、女學雜誌は、今后たとひ月一回の發兌に止むと雖ども、其紙數、其分量、其品質に於て、必らずや、過去と大差なきに至らん也。讀者冀はくは、多年の情誼を念じ、編者が微衷を察し、女學雜誌の孤忠を憫れみ、編者が新たなる事業に對して同情を惠まるゝと共に、此の老旗幟の爲めに熱愛を寄することを減じ玉ふ莫れ。

月刊女學雜誌は毎月廿五日出版す。毎月編輯及廣告〆切は十五日とす。

十一月以后麹町區下六番町六番地に移轉。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十七年
十月二十七日發兌

第四百三號

社説

大日本起てり

戰塲に心を馳せて常職を忘るゝは、不可なり。常職を忘れて戰事に狂するは、不可なり。敵を殺すを光榮とするは、不可なり。殘虐を勇なりとするは、不可なり。現在の一大事、戰鬪の外になしとするは、不可なり。如今報國の事業、只だ出戰に及くなしとするは、不可なり。

然れども、戰爭は、確かに日本現今の大事件なり。之に冷々として、何等の痛痒を感ぜざるは、尤とも不可なり。

今に於て、戰かふは、國家が當に爲すべきの事を爲せる也。國家、戰かふの時、軍に出で、劍銃を執るは、兵士が當に爲すべきの事を爲せる也。國家と兵士とが、其の當に爲す可きの事を成しつゝあるが如く、四民万衆は、當に各自の職分に於て其の爲すべきの事業に盡粹すべし。

加之、今は、正さに一大機會なり。國家は大ひに活動し、國民、大ひに奮踴すべし。元氣、すべての國脈に激通せよ。慨念、あらゆる同胞を聳昂せよ。凡天の悉とく轟ろき渡り、全地の皆な震るひ搖くが如く、銀河の一時に決して億万星の燦爛として雨ふり十方世界の草木乍まち烈風に躍つて大枝細葉の皆な慟哭するが如くなれよ。

大和民族、もと是れ輕淺浮薄の細人種にはあらず。豪膽、日東に耀やき、猛氣、島外に溢れ、堂々乎として、隆んに大有爲の氣節ありき。幾度か閉鎖せられ、幾度か屈折せられ、遂に暫らく因循として、姑息厭世の悲境に沈淪せしとは雖ども、天與の稟質は、夏の熱するが如く燃えざる可らず、大江の逸するが如く流れざる可らず。何ものか、久しく之を禁止することを得んや。

幕府の英傑、之が爲めに痛悶せり。維新の人豪、之が爲めに艱難せり。王政復古、天境、戸開けてより二十有七年、第二

維新の聖機、眼前に在り。

開戰は、即はち、導火なりき。玆に、其火花を切りたり。万衆の眼、之に集中するは、禁ぜじ。億兆の念、之に掛托するは、可し。但だ、此の一事件の故に、手を空らにして、當本の要務を曠しふすると莫れ。國家に万職あり、國民の麗、億のみならす。人々、第一の義務に盡さずして可ならんや。

但だ熱望熱告して止む能わざる所ろのものは、同胞、今の時は即はち非尋常なれよ、非尋常の職務に對してにあらず、其常職に對して非尋常なれよと言ふと、是れ也。

學生は、甚しく勉強すべし。將士、軍さに倒るるもの多し。將來の國民として、其欠を補ふものは、誰ぞ。日本の英物、今や巨多の數を失なわんとす、之に代るものは、誰ぞ。目今の學生は、甚しく勉强せざる可らず。

農夫は、深く耕やすべし。女工は、多く織るべし。鑛夫は、大ひに採掘すべし。商賈は隆んに貿易すべし。深く耕やさずんば、糧食を足すと能わじ。多く織らずんば、衣服を繕らふと能わじ。大ひに掘らずんば、鑛鐵を何如んせん。隆んに賣らずんば、需要を何如んせん。

歩ゆむものは、一層、迅速なれ。坐するものは、一段、確固たれ。汗するものは、更に汗せよ、息するものは、更に息せよ。説くものは、聲を張上げよ。聞くものは、耳を近づけよ。縫ふものは、針を早くせよ、煮るものは、火を昌んにせよ。客に接するものは、簡率なれ。人に盡すものは、大量なれ。懦夫は起つべし。弱者は、勵むべし。すべての人、皆惣て强盛なれよ。

見よ。大日本の國家、將に島より出でて、大陸に臨まんとす。日本出でずんば、東洋を如何にせん。東洋、改まらずんば、世界を如何んせん。見よ、見よ、大日本。吾等が大ひなる日本は、今や世界に出でつヽあり。

車に駕して車の進行を知らざるは、睡れるもの也。船に乘じて船の航進を知らざるは、醉へるもの也。吾等四千万、日本島の上に同乘せり。聞けよ、見よ、耳を聳てよ、眼光を放てよ。大なる日本島は、搖然として動き出せり。

太清の義人に告ぐ

語ばを寄す、太清四百餘州の民よ。吾等が、大ひに成さんと

するは、侵畧に非ざる也。諸君、すでに國を建てて國に屬す、吾輩、何すれぞ、諸君の國を奪はんや。諸君、悲しむべし、未だ奮起せざる也。諸君、奮ふべし、未だ警醒せざるに非ずや。見るべし、愛親覺羅氏の政府、何等の醜態ぞ。又見よ、四百余州、何等の蠻態ぞ。諸君、警醒せず、吾輩之を驚ろかさざるを得ず。諸君、奮發せず、吾輩之を激勵せざるを得ず。四百余州、昏睡せり、大日本は之を攪動せざるを得ざる也。

既に四億の人間あり、豈に義人なからんや。義人、須からく起つべし、日本人民は義人の友なり。義人、當に起つて、國弊を警戒すべし、義人相合して、國弊を改革すべし。豐島、成歡、牙山、平壤、海洋島の事、豈に清人を警しめざらんや。義人、冀はくは、速やかに起て。日本人民は、諸君を助けて、其の國弊を救はんとする耳。むかし、諸君が祖先我國に來侵せんとする時、僧日蓮は、絶叫して言へり、

今の世には何となくとも道心起りぬべし、此世のありさま厭ふともよもいとはれじ。日本の人々定めて大苦に遇ぬと見えて候眼前の事ぞかし。文永九年二月十一日の合戰に、盛なりし花の大風に散るが如く、清絹の大火に燒が如くなりしに、世を厭ふ人爭でかなかるらん。文永十一年の十月、壹岐對馬の者共一時に死人となりし事は何に人の上とおぼすか。當時も彼打手に向ひたる人々の歎き老たる親、少なき子、いとをしき妻、はなれがたき栖を打捨てて、由なき海を守り、雲の見ゆれば旗歟と疑がひ、釣船の見ゆれば、兵船かと肝をけす、日に一二度、山へ登り、夜に三四度、馬に鞍をく、現身に修羅道を感じたり。

嗚呼、國家、時として誤まりなきとなし。たゞ過まつては速やかに改むるある耳。玆に、前事を說ひて、現在を鑑す。もし國民能く改ためて、其預言者に聞くとあらば、外來の敵、それ何んかあらん。

況んや、日東の天子、慈仁を以て諸君に臨む。皇師の向ふ所ろ、單だ、愛親覺羅氏の過ちを正し、以て、支那四百余州を改革するにある耳。太清の義人、感謝して力を協はせ、以て速かに義の目的を達せしめよ。

故に、吾人は、彼等義人の爲めに祈ると切なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○美のおもて

造化が其美を見めすや、先づ自然界には『花』を以てし、人生には『戀』を以てす。ともに是れ姿の尤とも艶なるもの、色をもて喩えんには、其の紅のごときか。人間最初に心情の素革を破ぶり、始めて風流の光を入れて、胸界一種の新奇なる感觸あるは、即はち此の二樣の美形を見たるの時とす。然れども、久しく此の二形に拘泥して、天地の美たゞ之を以て終極となせるが如く感ぜん者は、疎そかなる哉。少こしく、心を擴ひろめて、識量の分を大きやかにし、又深宮の情さけを濃やかにして、物の哀れに纖細なる時は、眼こを觸るゝ所ろ、何れか、花、何れか、戀ならざるべき。たゞに、枯木寒鳥の趣むき優しく、醜婦野人の姿、たのもしきのみかは。」黯然たる眞暗の夜も、平延泥濘、何の異色なき足下一面の土地も、むくつけき不男も、たしなみ無き椀白むすめも、之を眺めて、つく〲と眺むるうちには、温光ゆるぎ出でて、一種の美、顯現し、なか〲に棄てがたき情熱に身をやくとはなるものなれ。もし一度び此の境界に入る時は、天地の風景、すべて美なり。詩人、わづかに其一分を吟じ、畫人ことさらに其一部を寫すと雖ども、何故に若く撰擇して、他の大本躰を遺せるやと、笑止の思ひなきと能はず。伏仰行吟して、歩々わけゆく所ろ、何れも花、何れも戀、抑そも何ものを一とつ吾物とし、何ものを特に美なりとすべき。寧しろ微笑みて、默し、手を拱ぬきて眺むるに及かざる也。『ある人の月ばかり、おもしろきものはあらじといひしに、又ひとり、露こそあはれなれと爭そひしこそおかしけれ、折にふれば、なにかは哀れならざらん、』爭そふのみこそ、苦々しけれ。玆に美の情緒を亂さゞらんとすると、只だ最ともかたし。

○風流の音

風流は、詩歌管絃の私しするものにあらず。風の音に心を澄ませ、水の碎くるに思ひを刻み、松に呼び、葦に動く天籟のひゞきに聽耳を傾むくれば、たゞ〱感歎悦喜の外ある可ら

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ず。幼稚なる歌よみが、爛熳たる櫻を見んとて、芳野に遠征する旅立ちを見れば、小兒が遊戲する姿と見えて亦面白し。何の罵しるとかあらん。月にいたみ、村雲に惜しむ、一年秀吟の宗匠が、殊の外に本意なげに見ゆるも、氣の毒にて、盆正月を落したる村孃と相似たり。安くんぞ憫れまざらんや。左れど、風流は只だ此邊にのみ存すと思はんものこそ痛ましけれ。籬をつくろひ、草に刈り、畦を耕やしなどして、余念なく田夫野人の間に雜らはんもの、又は、日々役々として、所云る算筆多忙の事務の央ばに埋もれんもの、豈に人知らぬ風流に心を温ためて、綽々として余裕なからんや。國家、徵すとき之に役し、國家事なき時、家に團欒し、慨然として起つとき、猛虎の如く、奮然として怒るとき、預言者の如く、同時、欣々怡々として忘るゝと能はざるものあるが如くなるこそ、眞とに風流の人なるべけれ。白河の樂翁などは、眞によく此邊の消息を味はひ玉ひけん。

○吾兒に人生を憶ふ

吾に子と云ふもの與へられ、其の無邪氣にして頑是なく、いぢらしくして、殊勝なる、日に〳〵生ひ立ちて、日に〳〵可愛ゆさの增すを見るとき、其都度、警戒發心して、肅然、本我に鍛練する所ろのものは、『彼が死』と云へるとなり。父をして、生死の問題に考着し、人生の秘義に思ひを凝らさしむるもの、蓋し愛子の如く切なるものは、鮮なし。

○戸内の罵聲

ふと立ちどまりて耳を聳だつれば、親が子を叱りて烈しく打擲する下に、子は逃げもやらず、御免なさい〳〵と叫び、ヒイ〳〵と泣きつゝ陳謝するを、又もや烈しき響して連打連擊するの音にてある也。無常の感、切りに起りて、得も言はれず。茫然、自失して、空しく起ち、勇氣、悉とく失せて、五躰、毀れたる心地し、余はしほ〳〵として眺めつゝあり。落葉、風に捲かれて、相追ふて戲むれを爲す。之に飛び付かんとする子犬をいト引よせて頭らを撫でつゝ、立もせで尚ほ耳を傾むくれば、打擲は止みて、泣聲は尙止まず、父の怒れる聲音、折々もれて、妻にやあらん不平らしき辨解きこゆ。又もや、父の起上りて、何ものをか打たんとするや、子は再たび

叫んで、私しが悪るひのです〱と言ふとき、打つならば、打てと言ふ妻の聲きこゆ。立ち入らんとの、何となく心驚ろかれ、吾ながら太たく臆して、たゞ子犬をヒシと抱く。木の葉も、靜まりて、何等の出來事ぞと奇しむもの丶如し。嗚呼、ホーム。抑も、汝の與ふる所ろ何如に。憶ふ昔し、男子を失なへるの寡婦、其子の前途を思ひ煩らふの故に、本意なくも二度の男に見えやしけん。飲酒、放埓、貧困、不和。あゝ、一家の歴史、明らかに見るべし。默して語る、戸内の一男一女よ。汝、かつて相戀ひして、花を散らし、花に浴みしたるとなからずや。花は、つねに笑まし氣なり。人間、何んぞ早く澁面するや。試ろみに、喧嘩爭論の央ばに、一枝を立よ。花は、莞爾として汝等が昔しを忍べとうたはん。

○艱難のよろこび

人生の極旨は、人品を高くするにあるとを識とり、天父、大敎化の柄を握りて、万事を此の大御心の衷に攝理し玉ふと確信する族に於ては、『艱難』と云へるもの、新らしき意義の出來事とはなる也。吾等、到底、進歩せざる可らず。進歩の前面に置れたる關門は、是非とも通過せざる可らず、山岳は是非とも超えざる可らず、河川は是非とも亂らざる可らず。これ實に進歩の爲の要件にして、是なくんば即はち進歩にはあらざる也。夫れ、進歩の爲めの此等の要件に名づけて、世人は之を艱難と云ふ。故に、艱難は、もと必らず出で合はざる可らず、打勝たざる可らず、而して其敎練する所ろを甘受せざる可らざる者なるに、其名號の不穩當なると同じく、人や丶もすれば之を避けて反つて避難の幸を祝する者あるは、愚なる哉。今日もし此の艱難を避けんには、明日他の艱難を迎へざる可らず。到底、或る階段の敎練は、之に相當せる或形に於ての艱難によりて受けざる可らず。艱難にして、慈愛ある天父が下す學科にてあらんには、必らずや遂に其敎練を受けしめずんば止み玉はじ。義にして明らかなる天の大敎師は、試練を粗忽にして、僥倖の進歩を了せしめ玉ふとある可らず。故に、吾等は、目前に與へられたる艱難を、適當せる學科として拜受し、速かに其學業に及第するを好とす。而して、艱難の大なるは、學科の大ひなるもの也。學科の大ひなるは、學生として吾を待するもの丶吾を優れたりとする也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

吾が學級の上りたるを悟る、何ぞ感謝せざるを得ん。此に於てか、吾等は、艱難に欣喜す。艱難に、天父の御聲を聞く。其表てに、慈愛の顯示を看る。艱難は、歡こび迎ふべき者也。

○情を讀むの學

書を讀み字を講ずるに、同もに情を讀むの法を識らずんばある可らず。大抵、激熱の人、當世に反動し易く、所言、やゝもすれば、中庸を失し易し。これ、哲學者として、永久の純理を講ずるにあらず、道士として、万世の常經を講ずるにあらざる以上は、當世の弊を矯めんとして、反應の激劑を下すは、已むを得ざるもの也。然るに、世人、字形を讀みて、情を察せず。文字に一様尋常の旨義を附して、一概に淺解し去らんとす。志士の誤まられ易きは、此の故なり。むかし、老莊の道德を輕ろんぜられしは、之が爲めなり。近時、雪池、兆民、の文大率ね世人に疑はるゝもの亦た之が爲め也故に、讀書の方、更に一を加へざる可らず。字講の覺悟、更に一段を深くすべし。即はち讀情の事、當に一要件として、文界に記臆せらるべき也。

○人生些觀（一）

窓下微笑

人事の觀察は、人間學の心理か、此の講究、尤も緊要也。

◉ありがたき玉の如き聖人も、ちとの破綻なきにあらず、少しの欠典なきにあらず、龍の爪を見する如く、チラ〳〵と落度を顯はすもの也。之れ、人間の眞相にして、人生の實事なり。善き小說家は、よく之を知り、老巧の世故者は、巧みに之を辨まふ。ユーゴが聖僧もッシウル、ミリエルは即はち此の通りなり。馬琴が、犬江仁などは、此の所に申分あり。少年が人を理想するとき、此の秘訣を知らず。老人が人物を崇むるときは、常に之を忘れず。

◉神經質とは、細人の特質にて、英雄豪傑などには無きものと思ふ人多し、誤まりなり。成ほど、神經質を制すると能はずして、之を露はすものは、餘り偉人にあらず。左れど、偉人の本躰は、皆な神經質なり、たゞ之を制し居るのみ也。磊磊落々とは、水液質の謂ひにあらず、內心の神經を表てに制して、堂々悠々たるの躰なり。古來の人傑を仔細に見よ、其の內部の神經質ならざるもの、何處にありや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○聾耳錄（一）

默吟生

他山の石は、崑岡の玉か。近人の警語、尤さも聞くべし。

●原坦山が墓誌銘を新聞紙上にて讀むに、中に曰く、彼れ禪學を聞き、之れ大丈夫の學なりとして則はち之を修めたりとあり。

默吟生曰く、之れ大丈夫の學なりとして修むと云ふ。高眼卓抜、すでに凡儒を醒ますに足る。大抵、世人、宗教を視ると、極めて輕ろく、宗教家自から之を視ると亦た重厚ならず。如斯くして安くんぞ、宗教の眞相を觀破するを得んや。抑そも死生天地の事、一大事なり。此の一大事の最大問題未だ決せず、腔子裏の大安心未だ定まらずんば、丈夫世に立つも將た何事をか成さんや。故に曰く、先づ禪定を得るとを勉む、これ大丈夫の事なりと。

●野津道貫が平壤に軍を進めんとする時、他に向つて曰く、此回生還を期せず、一死以て知遇の恩に酬ひ奉らんと。

默吟生曰く、今の名將が大元帥に於ける、知遇の感を以て之に對すること斯の如し。之れ、實に驚ろく可きの偉象、張目して注視すべく、感泣して慶賀すべきの事。

東西女學比観

（一）道理は易し適用は難し

事物の道理は、千種万類にして、其旨義も亦た高尚深遠なるもの多けれども、學んで其の大畧を心得んとは容易なり。所云ゆる普通一般の學問を爲すものに於ては、則はち世上大躰の道理を大率ね辨識するものにして、大凡そ人事世態に對し一と通りの理解を寄せんと難きにあらず。左れば、道理なるものは、一見する所ろ、其數太はだ多くして、其意味極めて深遠なるが如くなれども、其の大凡そのものに付きて之を言へば、存外に單純容易にして、其の種類も亦た左程に多からざるもの也。

但だ、至難にして尤とも複雜なるは、道理を實地に適用し、其の精神を活動せしむるの方法即はち是れ也。實際と云へば、兎角單純淺薄なるとの如く誤解するは生學者の僻なれども、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

眞とや實際と云ふ者ほど、深遠にして複雜なる者はあるまじき也。道理と云へば、たゞ一つの道理を言ふことなれども、實際なるものに於ては、幾多の事情に參酌し、前后左右、過去現在未來の時所位に相應して、正に適中する所ろを發見するものなれば、其實は、道理の集合したるものに異ならず。故に、實際とは、道理のステーションの如し。幾本の理道が之に合するのみならず、亦之より發するもの也。而も、死したる動かざる軌道を言ふにあらずして、煙吐き車轟ろく活動の方に付きて言ふものなれば、其の六かしきこと勿論なり。

故に、道理は學び易けれども、實際は考がふるに難し。世に、物識り、本よみと云ふものは容易すく得らるれども、實際の活用家は太はだ得がたし。論語の精神を尤とも能く活用せし人は孔子なれども、孔子は未だ曾て論語を讀みしことあらず。然るに論語を能く讀み好く暗らんじ乍ら、茫然として全く論語を知らざるものも多し。讀書博識の効力なきこと、此の一例によりて推諒すべし。

彼の洋行家は、何を視察して歸朝せらるるや。西洋方今の現況を其まゝ眼中にうつし、之を日本に持歸りて亦其まゝ複寫するのみならば、寧ろ初めより寫眞を取りよせ、繁昌記を讀み、報告を集め、坐がら天下の現況を知る方、はるかに手數を省ぶき、入用を減ずべし。然るに、生きたる學者が、態々渡行して、實地に其の景況を視察するものは、單に視るのみならず、之を察するにあり。能く周圍の事情に對する關係を調査して、『かゝる場合ゆへ斯る躰に施行す』と云ふ妙機を捉らへ、飜がへつて之を日本方今の事情に比較して、之に適用する工夫を案じ、所云る精神を活かして、形を變通するの大自在識を得んが爲めならずや。然るに、滔々たる洋行歸朝者の如く、たゞ西洋の智識を丸のみにして、之れを其まゝ吾國に移さんとする如きは、適用にあらずして摸倣なり、智識にあらずして寫眞なり。即はち、視察者の名を與へがたきもの也。

たとひ洋行せずとも、西洋の書を讀んで之に心醉し、西洋の風を聞きて之に心醉し、輕々心醉して一々之に則とり、毫も活用の辨識なき族は、其の愚かさ、宛然、右の洋行者の如し。此類の洋行者は、尤とも多し。

むかし、或人、仲秋の月を歌よむ。一と年、くもりて月の見

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

えざりければ、

ひと丶せの月をくもらす今夜かな。

と吟じぬ。あくる年の仲秋には、一天、青海原の如く、明月皎々として、些塵の雲もなかりしかば、亦咏じて、

一年のつきをくもらす今よいかな。

と吟じたりとぞ。同一の文字、同一の句調ながら、周圍の景色變わると共に、歌の意味も亦た一變するにあらずや。左れば、形に拘泥し、文字に局促として、其の包圍に對する微妙神逸の聖鎖を握らずば、到底、其精髓を感得するとは出來まじき也。

(二)「ホーム」の區域東西相異の事

「ホーム」を樂しくすべしとは、近年既に確定したる明白の道理なり。誰ありてか、之を否まんや。左れど、「ホーム」なる語を當て嵌めべき場所は何處なりやと言ふとは、深く思慮すべきの問題なり。先づ、亞米利加風をもつて言はば、ホームとは、夫婦を中心として出來たる一家族を稱す。

米國などは、個人主義發達し、世間の習慣一々之に和せり。一家の建築すら之に準じて、家族中の一人一人、一室を所有し、子供に至るまで、自分の部屋と云ふを定め、此の部屋には一々鍵あり錠ありて、宛がら別々の城廓の如し。而して、彼等は、食事の時に一堂に集まり、談話の時に一堂に集まり、即はち交際の意味を以て一堂に相ひ集まる外は、自個の城廓と定まりたる一室内に獨居するを常とす。之れ、一家内に至るまで、個人主義の能く行はれ居る證據にあらずや。一家內、すでに斯の如し、其他の万事皆な斯の如し。

然るに、吾日本には、君父族長主義普ねく行はれ、一家の內には、ことに其の現象あり。玄關より奧に至る迄、一切、主人の管轄にして、万事此の旦那に從ふの主旨をもつて整理せらる。故に、部屋の仕切り、伏間障子の造り方、悉とく開放共通の主義にて、もし一旦之を取はづせば、何如に洪大なる大家屋と雖ども、則はち通じて一室となるべし。これ、一家に一人の長ありて、此の長、全家屋の何處をも支配するの精神、形を取りたるもの也。

左れば、日本及亞米利加の家屋を比較せんに、試ろみに、大

小廣狹の觀念を取去り、單に區劃と云へる一事によつて思慮すれば、日本の一軒は、即はち亞米利加の一家内の一室に同じ。亞米利加のホームなるものは、此の室の若干が相合したる集合家屋の事にて、眞とや、一軒の下にある五六の家々が相合し相親しむの交情に對して名を下せる也。其の精神を酌んで、眞實の意義を言はば、日本に於ては、單に一軒の家のみならず、此家と近親の關係ある三四の親類との交通交際の上に、即はちホームの名を適用すべき筈なり。亞米利加に匹適する日本のホームとは、極親の親戚間に於ける無形の交通區域の事なるべし。況んや、ホームの主旨は、極親別懇のもの相ひ和樂するにある所ろ、亞米利加などに於ては、夫婦と其子とのみを以て一箇のホーム内に容べき極別懇親のものとなせども、日本の習慣に於ては、本家新宅、兄弟姉妹、祖孫叔姪などの間柄をも、尤とも別懇にすべきものの中に義定したれば、即はち此等は、所云るホームの要素として共に和樂すべき區域内に入れべきもの也。この當に入れべき要素を外にして、たゞ其の一部分のみにて和樂せんとするも、世上の評判と、古來の習慣とは、之を制して許すとなし。則はち、其制裁に隨がはざれば遂にホームの樂しみをも造りがたきが故に、ホームを造るの主旨より言ふも、必らずや亦た此等の要素を其うちのものとして算入厚待せざる可からず。

故に、亞米利加風のホームの和樂に感服して、之を日本の現時にうつし、其美風の精神を活用せんと欲せば、先以て、ホームの區域東西相異なるの一事を辨識し、日本のホームの區域は、極親の親類間に相渉るもの也と覺り、此の區域内を一つのホームとして、此のホームを好良にし、以て所云るスヰートホームを造らざる可らずと覺悟するを正當とす。

女生鬱散錄

◉女生切りに歎じて學德ある婦人が良緣に疎とく、駿馬、大抵、痴男に率かるるの不運多しとて怨む。われ慰さめて曰く、これ豈に女生のみの歎きならんや、古へより志あるものが常に遭遇したる否運なり。古來、幾多の忠良の臣、賢君に會はずして、暗君に仕へ、遂に一身を慘傷するに至りし痛末を見よ。夫れ、才能技藝ありて而も適好の君を得ず、如此く大率ね、不釣合、不調和にして恨死せるもの、古來有力の男

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

子に最と多かりしことを知らば、何んぞ只だ今の女生に於てのみ之ありとして歎ずべけんやと。

●伯夷叔齊　は義を守りて、首陽山に餓死したり。今の女學生、其の學德の爲めに、其の主義の爲に、彼の二個の男子が義に殉死せる程の實例を致さゞる以上は、未だ以て、方今の苦痛を獨り女學生にのみ存する者の如く揚言すべからず。

●士農工商　の差別嚴然たりし當時に在ては、素町人、土百姓が、政治に啄を挿はさむは、不屆なりき。此の習ひ慣れとなりて、平民が、民權論など唱へ、國家の大事に出射張るは生意氣至極の事と見做されたる時節もありき。左れは今の女學生が、舊慣を破つて、外事に意見を挿はさむとき、概むね生意氣なりとして擯斥さるるは、珍らしき現象にあらず。

●女學生が爲すべき仕事　少なしと言ふものあり。成程、世が窮屈にして、自由に働らかせぬ故もあるべし。左れど、今の女學生が仕事の少なきに究するは、單に世間の罪のみにあらず。これ、世俗が見て上等優品なりとする仕事にのみ着目し、外形世評の何如んにのみ掛念して、實際の價値ある仕事を採らざるの致す所ろ也。仕事の高下尊卑は、之を成す人の品格によりて定まる、仕事そのものに固着したる定價とては無きもの也。ナイチンゲール出でざるうちは、看護は即はち病人の世話人なり、加賀の千代なきうちは、水くみは即はち水くみ也、其人を得て、其職を高くす。仕事は、皆な手を下す人によりて化せらるるものと知り、何如に世人が冷眼視し賤業視する職業なりとも、吾が赤心の之に任ずる限り、奮つて之に從事することを爲さんには、女學生が爲すべき仕事、目前に滔々として澤山なり。

●米國には女の職業多し　曰く、郵便局の官吏。曰く、電信局の官吏。曰く、出納局の官吏。曰く、簿記方。曰く、書記。曰く、小學校敎師。曰く、幼稚園保姆。曰く、何。曰く、何と。算へ來らば極めて多し。左れど若し、米國人をして同一の筆法により、日本の女の職業を列擧せしむれば、將に曰わんとす、曰く、髮結ひ。曰く、洗濯。曰く、風呂番。曰く、茶屋女。曰く、仕立物屋。曰く、子もり。曰く、何。曰く、何と。すべて遙かに眺むる時は、只だ盛んに只だ美しく見ゆるのみ、直接足下に於て感ずる如き不都合は見へぬもの也。外國にのみ女の仕事多くして、我日本には、少なきものと誤解すること勿れ。

評論

透谷集を讀む

◎物在人亡無見期、門外青山似舊時。やうやく成れる透谷集を抱ひて感慨禁じがたし。

開巻第一、透谷の肖像現はる。緘閉せる口頭、縮蹙せる眉端、こゝには更らに一層の觀ありて、今は亡き人の亡き后の姿を見めすか。

幸はひにして、彼が揮毫の恰好なるもの遺りけり。蓬萊曲を友人に贈らんとして、自から之に題せしものとぞ。句に

　折れたまゝ咲いて見せたる百合の花

嗚呼、これも亦た定運を預言せしものか。何んぞ事々に渠を示めすとの多きや。

◎第一章は、即はち『厭世詩家と女姓』なり。これ、余が彼人と初めて相見たる時の贈り物なり。君、初めより眞贄。勃率として余に問ふ、君が西行法師を好み玉ふの由縁いかにと。當日の景形、歴々として眼頭にあり。

曰く、

　戀愛は各人の胸裡に一墨痕を印して外には見ゆ可らざるも終生抹する事能はざる者となすの奇跡なり。各人各箇に人生の奥義の一端に入るを得るは戀愛の時期を通過しての後なるべし。夫れ戀愛は透明にして美の眞を貫ぬく、戀愛あらざる内は社會は一個の他人なるが如くに頓着あらず、戀愛ある後は物のあはれ風物の光景何となく假を去つて實に就き隣家より我家に移るが如く覺ゆるなれ。

蓋し君が此論を作したるコレリッヂが「ロメオ、エンド、ジユリエット」と評したる左の一句によりて感發したるものと云へり、

　ロメオの戀愛は彼自身の意匠を戀愛せし也。第一の愛婦なるロザリンは自身の意匠の假物なり。

故に曰く、

　生理上にて男性なるが故に女性を慕ひ女性なるが故に男性を慕ふのみとするは人間の價格を禽獸の位地に遷す者なり、春心の勃發すると同時に戀愛を生ずると言ふは古

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

來似非小說家の人生を卑しみて己れの卑陋なる理想の中に縮小したる毒弊なり。戀愛豈に單純なる思慕ならんや、想世界と實世界との戰爭より想世界の敗將をして立籠らしむる牙城となるは即はち戀愛なり。

戀愛を說くもの多し。然れども、說て能く此の如く微妙高遠なるものは鮮なし。

以下、試みに讀もてゆけば、既に再三熟讀せし懇知の字句ながら、回々、味を新たにして、今は則はち一層の生色ある心地せらる。云く、

誠信は以て厭世思想に勝つことを得べし。厭世の眞相を知りたる人にして之に勝つほどの誠信あらん人は凡俗ならざるべし。

情は鬪爭すべき質を以て生れたる元素なれども、其戀愛の域に進む時は全然平和調美の者となり、知らず識らず一女性の中に圓滿を畫かしむ。

男女既に合して一となりたる曉には空行く雲にも顏あるが如く森に鳴く鳥の聲にも悉とく調子あるが如く昨日といふ過去は幾十年を經たる昔日の如く今日といふ現在は幾代にも亘るべき實存の如くに感じ、今迄は緣遠かりし社界は急に間近に迫り來り今迄は深く念頭に掛けざりし儀式も義務も急速に押しかけ來る。

夫れ詩人は頑物なり、世路を濶步することを好まずして我が自から造れる天地の中に逍遙する者なり。

句々皆な金玉、宛がらコンコルドの美聲を聞くが如し。皆これ不滅の確言、永久に生き殘るべき秀句なり。

◎余は、次に、「松島に於て芭蕉翁を讀む」の一章を見んとせり。想ふ昔し迎春行の遊士、九州を去つて四國に渡らんとし、赤間ヶ關に船を出して伊豫國三津ヶ濱に下り、次の便船を待ちて一日の閑ありしとき、則はち到來せる女學雜誌を開きて此文を讀みにき。日高くして、波小さく、灣頭船未だ來らずして、客舍わづかに一人をのこし、漁師、濱砂の中に匍匐して、無邪氣の談笑を爲す。正に是れ天下太平、四方日本ばれの景色なりき。此時に於て、客窓、筆を濁れる墨汁に浸し、長崎及熊本にて遭遇せし感慨を記せば、海邊の日輪、曝露せる客窓を射て、明陽反つて堪へがたし。透谷が、孤燈を吹き消し、小鬼大鬼を拂ひ、枕を蹴つて立上り、一隅の圓柱

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に倚つて、

静坐稍や久し無言の妙漸やく熟す、暗寂の好味將に佳境に進まんとする時、破笠弊衣の一老叟わが前に顯はれぬ。

われ仍ほ無言なり、彼も唇を結びて物言はず。

とあるに至つて、神氣飄忽、模糊として濃霧の中にあり。余は透谷の至文に醉いたりき。

曰く、

飄逸は吾性なり。飄逸せざれば吾性は完からざるが如き感あり。天地粹あり、山水美あり、造化之を包みて景勝の地に於て其一端を露はす也。詩性ある者が景勝の地に來りて神動き氣躍るは至當の理なり。然れども、景勝の地は僅かに造化が包裡する粹美の一端なる事を知らば、景勝其自身に對する觀心は甚はだ大ならずして景勝を通じ風光を貫ぬいて造化の秘藏に進み、其粹美を領得するは豈に詩人の職にあらずや。如何にして造化の秘藏に進み、粹美を縱まゝにするとを得む。如何にして俗韻を脫し高邁なる逸興を樂しむを得ん、請ふ共に無言なる蕉翁に聽かむ。

迷宮と知つて迷宮に入るは文士の樂しむ所ろにして、迷宮に入る事能はざるは文士の悲しむ所ろなり。古へより文士の景勝を探る者未だ迷宮に入らざるに、未だ妖魅を受けざるに、未だ造化の秘藏に迫つかざるに、先づ筆管を握つて秀句を吐かんとする者多し。造化に對して禮を失なふものと云ふべし。彼等は彫琢したる巧句を得べし、然れども妖魅せられざる前の巧句は人工なり、安くんぞ神靈に動かされたる天工の奇句を咏出する事を得んや。ひとり探景の詩文のみに就きて云ふにあらず、凡ての文章が神に入ると入らざるとは即はち此境にあり。

景勝は多少のインスピレーションを何人にも與ふる者なり。故に景勝は如何なる田夫野郎をも詩氣を帶びて逍遙する者とならしむる也。然るに所云る詩客なる者多くは景勝を以て詩を成さゞる可らざる所を思ふ。景勝をして自然に詩を作らしめず、自から强いて詩を造らんとす、こは實に說題して歌を造る歌人の惡風と共に日東の陋習なり。

眞とに是れ美の深宮に入つて其が女神の本懷をさぐり、古來

幾多の詩人が、景勝にあひて眩惑し詩情反つて澁滯したる所以の秘義を開くもの。而して、之を辨ずると、皎乎たり、悠如たり、何等清逸幽透の文ぞや。惟ふに、蕉翁、尙ほ沈默して無言の儘にておはすべし。只だ微笑して靜かに點頭せらるるの心地し、あり〱と其姿見ゆ。

◎「心機妙變を論ず」此文の女學雜誌に出づるや、余、尤とも感歎して措かず。一朝、村舍を出でゝ京に走るの時、車上、幾回か默誦し、玩味し、再玩し、微笑し、感激し、速かに珍重の意を露はしたく煩悶するの時、番町松堤のほとり、はしなく古藤庵にあふ。余、叫んで曰く、心機妙變、何等の妙ぞ。古藤庵莞爾として曰く、余も亦た之を讀みてより切りに透谷にあひたく、昨日行き訪ふて今朝今ま歸る也と。彼は、脚半を穿ち草鞋をはき、裳を搦げて堤上草ふかきあたりを露を拂ひつゝ歩みし也。

曰く、

蓮池に臨みて蓮蕾の破るるを見るは人の難しとする所ろ也。蓮華何の精あるかを知らず、俗物の見るを厭ふて幾多の見物人を失望せしむると多しと聞く。曉鴉に先ちて

寢床を出で池頭に立ちて蓮女第一回の新粧を拜せんとするの志あるもの旣に俗物を以て指目するに忍びず、然れども佳人何すれぞ無情なる、往々として是等の風流客を追ひ回へすとあるは。人間界の心池の中に靈活なる動物の心機妙轉の瞬時の變化も、或は蓮華開發に似たるところあり。

以下、余は抄出せじ。抄出する能はざる也。たゞ戀慕して瞠着たるのみ。

◎あゝ余は將來久しく此の集を愛讀せん。然り一人にて默讀し玩味せん。今ま余は女學雜誌の讀者の前にあるとを忘れたり。此の讀者は、旣に皆な此等の至文を讀味せられたり。曰く、處女の純潔を論ず(富山洞伏姬の一例の觀察)。曰く鬼心非鬼心。曰く、富嶽の詩神を思ふ。曰く、惡夢。曰く、髑髏舞。もし此等を茲に抄出せんとせば、此の一冊を盡すも尙ほ足らじ。

◎去る者日々に疎きか。去る者は眞に日々に慕はしきもの也。透谷逝きてより日を經るに隨つて、彼は人間らしからずなりぬ。彼は一塊の肉にあらず、彼は一の靈なり。彼は、彌よ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

尊とげになりぬ、彼は最早や人類にあらず。彼が遺骨は高輪台上、古寺院の冷土の下にあれども、紀念せらるべき彼の本躰は、渾然として彼蒼と同化し、飄々として美の翼に乘り、何處とも知らず只だ高遠にして敬崇すべき所ろに宿せりと感ず。論士、往々祭典の超源を辨じて、進化の俗解に嵌入せしめんとすれども、道心の最と深き所ろに自然に固着せる此の止みがたき天眞を無視するは容す可らず。

哲學何ものぞ、俗論何ものぞ。宇宙廓々乎たり。理外の理、眞とに人情の極致。俗論の罵嘲する所ろ即はち眞の美ひそむと多し。透谷が批評の拔然として世間に優れたるものは、此消息を漏らすの使命を盡しければ也。透谷の一部は、透谷集にあり、透谷集は其主人が心友とせしハムレツトと問ふに、

"There are more things in heaven and earth, Horatio,
Than are dreamt of in your philosophy."

と歌ふなるべし。

○徳川光圀

光圀、老後、壽藏を造り、碑文を自作して曰く、

其の人と爲りや、物に滯らず、事に着せず、神儒を尊とび而して神儒を駁し、佛老を崇め而も佛老を排ぞく、讀めども必らず解せんを求めず、歡こびも歡こびを歡こばず、憂へも憂を憂とせず。

是れ、梅里先生が理想にして、即はち光圀尤も苦心の所ろ、此文によりて、彼を凝滯執着せざりし人となすものは、眞に彼を知らざるもの也。彼が希望こゝに在り、彼が鍛練玆にあり、故に彼は能く練磨して完璧となし、首尾よく偉大なる模型を造り上たる也。然れども、彼が熱情、物に動き易く、執着にして讎を忘れがたき氣質は、當時往々實際變幻の間に露出せし也。

左れど、玆に成版せる開發社の「徳川光圀」は、專ぱら、少年徳育の爲めに編述せられたるを察し(序文は之を證す、)又、編者が彼を理想とし、彼に信仰して以て躬から琢磨せんとするの主旨多きに居ると（緒言明言す）を思ふに於ては、彫鏤切磋の工夫を說かずして、直ちに成了せる美なる巨像を崇觀するは當然の事とす。（普及舍發兌 定價二十五錢）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○徳川政教考

落後生吉田東伍君、曩に讀賣新聞紙上に多年の學積を漏らし、一時讀書社會を驚かす。材料の豐富、歡察の警拔、文章の奇深、三對の偉觀を爲せり。今ま、玆に上下二卷となりて出でたるを更に通讀し、興味ますく湧く。むかし、或人、ベーコンの論文を評して、重やかに生り下りたる菓樹の枝の如しと言ひき。落後生の文も亦た此の類か。日韓古史斷の如き、大奥の女中の如き、皆な定評あり。近日、逆躰日本歷史なるものの新刊あらんとするよし。刮目してこれを待たんと欲す。（富山房發兌、定價上下、各三十五錢宛）

○紅葉の『紫』

巧緻纎細、讀者を悶殺し、悶者を驚絶せしむ。配合、既に妙、比較、太はだ妙、結尾、尤とも妙。皆是れ世間普通の事、眼前屢ば眺めて毫も異色あらざる者、一と度び、紅葉の撰擇にあひて、其着筆を經れば、神采燿然として、皆な奇芳あり。

十六章、すべて戯劇。而も『別の盃』に至るに及んで、人をして、笑倒し亦た暗泣せしむ。輕々、寫し去つて、千万無量の情あり。余をして意はず落涙數行ならしむ。三對の夫婦、二樣の能辨、兩々の乙女、二種の醫人。皆な是れ紅葉が慘澹たる妙配劑たり。而して、眞とに能く人生の一部を映すとを爲す。嗚呼、何ん等の老巧手ぞや。（春陽堂發兌）

○民友社の日清軍記

簡潔にして趣味多し。ことに、平壌開戰以前の事は、當時の新聞紙に於て○●の符をもて秘されしもの、玆には明記さるるにより、素より簡畧の記事ながら、一般讀者の爲には新らしきとの多くある也。（定價金十五錢）

○日本學制論

齊藤哲郎氏が題號の書を讀む。一小冊子なりと雖ども、太だ重んずべきの論策なり。大抵、今人の教育を論ずる、細岐に渉りて大躰を言ふもの鮮なし。此書、よく其の根本に着眼し、意想亦た卓拔、文章尤とも佳なり。（正價十二錢東京堂發兌）

爛煥

博物館を觀るの記（一）

無光

頭重ふなりて、畫筆とることも物憂くなりぬ。枕引き寄せて仰け様になり、兩手を首筋に當てゝ天井を睨むに、さてしも心やるわざにもあらず、椽側に出でゝ見渡せども、家々の屋根ばかりなり。空は鼠色に曇りて晴やかならず。座に歸りて烟草燻らすに、不圖、博物館の事を思ひ起しぬ。そは昨年のシカゴの世界博覽會に出品せられたる日本繪畫の、今は右の處に陳列せられてあるといふことなり。

父上も如何と誘ひまつるに、行かん宣ふ。小さき手帳を携へて、二人して門を出づ。道すがら笑しき話ども笑ひ興じつゝやがて屛風坂も越えぬ。森々たる上野の樹木、緑陰深ふして翠氣溢る。人も多からねば目に遮るうるさきものも少し。二人肩を比べてそこら散歩しつゝ、やがて切符二枚を購めて大なる黒門を入る。

館前の廣庭、心地いと晴やかなり。正面に巍然たる赤煉瓦を控えて、「セメント」の渟池、庭木の塊、さては彼方の薔薇園など、繪に見し西洋の樣に彷彿たり。邊りの椅子に腰うち掛けて暫く憇ひ、さて館内に入る。彼日本畫を陳列せる室は、多分二階ならんと、直に右方の石階を上り行けば、廊下に西洋畫の大なる寫眞を數多く掛け連ねたり。近頃博物館の風向の變りしかと、先づ驚かれぬ。そは兎に角、何よりも偖嬉くて見もてゆくに、口邊に笑も漏れて、歡嘆の聲頻りに、心の底より出づ。ラファエルのマドンナ（キリストとヨハ子を添ふ）を見て、其優にして艶なる、聖にして愛に充てる風彩に禮拜し、キリストの幼な顏の光り輝きヨハ子の容の聖なるに、己の穢れを恥ぢぬ。レオナードのモナ、リサ夫人の肖像はさるものにて、四年の工夫に成れる其魂膽を思ひ遣り、ニッコリと笑はんずる艶容の、人を動かす力あるに驚く。こはげに彼が傑作なるべし。婉美の中に、どこやら沈着にして嚴然、而かも古雅なる趣の隘れ居るは、是れレオナードのレオナードたる所以か。ランブランが畫ける、一男子の半身像、余は見るより、恍惚として、其「チアロスキユロ」（明暗法）に打た

れぬ。強き光線を受けたる半面と、暗き半面との續づき工合さては毛髪と額の關係、「ペック」（畫の術語にして畫の後ろ地をいふ）と人身との調和など、妙言ふ可らず。何ともいひぬ魔力ある空氣を籠めたるは、誠に古今獨歩の明暗家なるべし。此他のもの丶中にて、最も余を喜ばしたるは、一人の美人が小娘を抱きつ丶、此方を見て莞爾たる圖なり。こは優美の一語を以て顯はすを得べし。

けふは此處に頭を勞すべきに非れば、つと通り過て階上に至る。茲には西洋彫刻數箇並べてあり、是も亦不思議の事よと感じぬ。番人に彼の繪どもの在る室を問ふに、そは參考館に在りと答ふ。いそぎて其處に行き見れば、實にも〱、數多の傑作、まばゆき迄に懸け連ねてあり、大凡廿圖許り。

政府よりは莫大なる補助金を與へられ、且つは御役人方の鑑識ある御差圖までも受けられて、畢世の經營慘憺、日本の國粹を北米の大原に廣げんとの大抱負を以て、當世の大家方の一代の一品と畫かれたるものどもなれば、苦心の有る處も深く察せられて、畫きも習れぬ大幅に魂膽を挫かれたる跡も明瞭なり。而かも此處大日本帝國の博物館に陳列せられたるもの、余等燕雀如何で其堂奥を計り知るを得ん。批評などはをこがましとは思へども、雀の囂々も千に一つ當らぬものでもなし、折角來觀せし土產に、いざや思ふ處を舒べん。

如何なる邦、如何なる時代に於ける、如何なるものも、從來の歴史と、現在の境遇に因て支配せらるは數の免れざる處、又如何ともすべからず。今日の繪畫界の由來する處、實に維新前に在り、而かも今日と往時と多くの變遷を經ざるなり、繪畫が現今の進歩せる社會に後れて一偶に籠城し、或は獨り尊大に誇るものは、亦深き所以の存するありて、一概に其缺點を罵倒すべきものには非ず、直ちに余等の理想を以て彼等に注文するは頗る事情に暗きの譏を免れずと雖も、つら〱彼等の有樣を觀ずるに、常に嘆聲の丹田より出づるを覺えざるなり。余は信ず、今日は左樣に逡巡すべきの時に非ず、勇往大膽なる精神を以て、大に美術の畝を鋤き、耕し、枯株を去て、新しき苗を植ゆべきの時なるを。東洋が千年來深く藏めし美術思想は、其正路を辿りて、暗より光に移り、廿世紀を待て、萬國に其光輝を放つべきの時に近づき居るとを。須らく腐敗と頑盲とを驅り盡して、我が聖なる神壇を淸むべきの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時なるを。從來我邦の畫家なるものの多くは如何なる種類の人物にてありしか、又現今の地位と境遇は那點に在るかは、頗る爰に述ぶるの必要あり。

狩野派は維新前幕府の扶持を蒙り、常に將軍家の奧庭に出入し、頭を剃り圓めて御茶坊主に似せられ、僧侶に倣はされ、法眼、法師、法橋等の僧官を與へられて資格を表せられぬ。一方には命に從て筆を染め、一方には御宴の御相手もなし其祿位は永く子々孫々に傳へて、法律上の罪あるに非ざれば失ふの憂なきなり。又彼等は大小名旗本諸侍等にも出入して其需用に應ぜり、其頻りに品格と稱ふるは御大名的の品格てふものなりしなり。其工夫する處は、先祖の祿と共に、其流派をそッくり其儘維持することに在りしなり、門弟にして少しく風變りの事をすれば、忽ち破門の罰を被ぶりて、同時に生計の手蔓をも失ふの姿なりき。彼等は財を有せり。故に口の爲めに畵く必要はなかりき。彼等は花客を有せり、故に營々然として周旋奔走するの必要もなかりき。氣樂なることは旗本と異なるなきなり。藏の中には山なせる粉本古畵あり、以て剽盜編纂如何なる注文にも差支を生ずるの憂なし。家に數多の徒弟あり（師よりは弟子の方に往々勝れたるものあり）自分の出來ぬものは是等に畫かしめて落欵せば足れり。高貴の前に侍るには、和歌を知らでは不都合なり、兎に角に卅一字は連ねざる可らず。斯くして旗本と同じく軟化しつゝ、彼探幽が幕府に召されしより以來（二代將軍の時）維新の瓦解に至りぬ。彼等の畫題は或定限の中に置かれぬ、同じ樣の事を繰り返すに過ぎざりき。彼時代の商家の御座敷には、目出度くして成るべく當り障りの無きもの適當なれば、其畫く處は、鶴龜、七福神、蓬萊山。梅に鶯、竹には雀、松には鷹や鶴巣くふ。瀟湘八景、琶湖八景、富士の山と櫻の花。牡丹の側には楊貴妃立つ、桃は三千年西王母。太公望に諸葛侯明。偖又襖には唐獅子こそよからめ。聖賢の圖も僭上なれば、龍虎の勢、武士には似合し。高砂の尉と嫗は六十の賀を祝ほぐ。鍾馗大臣は五月の登によろしく、雛樣の摸樣は三月の節句に、金泥と朱を染め出す。朝日に波は誠にめでたく、孔雀鳳凰は何よりも美くし。菊は慈童が七百歳を祝し、雪は豐年の前兆四海治まる。岩には群青を塗りて、人には胡粉を施す。ポッく（點苔）三年中々六ヵ敷く、線を引くとき全身力みかへ

る。朱の塗り方は第一の熟練、胡粉の製法は一大秘法なり。古人の畫けるものは何でもよろしく、新らしきものを畫けば忽ち謀叛の汚名を受くなり。數へ立てなば秋の夜も猶ほ短きを怨まんとす。狩野派は斯くして繪畫界の覇權を握れること、幕府が全國の首たるが如かりしなり。其中時に勝れたる人の出でざりしにはあらねど、探幽常信以來、眞に生きて畫けるものあること稀なり、例を求めんに謡曲師が幕府に用ゐられ、全國に貴ばれしに等しかるべし。

狩野派と恰も反對の立場に在りて、高踏超然、詩を吟じ、書を誦し、支那人は天人よりも難有く、一も二もなく彼等に倣ふて、毫厘の差無からしめんと勤めたる文人畫派なるものあり。筆墨上の工夫慘憺、經營結構は、彼等の賤しむ處たり。洒々落々として實物に拘泥せず、自分も分らぬ山水人物、衣紋の描法に十幾許あり、山の皴法中々覺え切れず。誰の法則誰の畫法。點苔の名、木葉の種類、雲に石にも樣々あり、畫の觀る可らず、讀むべきものなりとは窮極の金言、片端より文を綴る如くに並べ始めて終りに至り、以て能事完しとす。山水の奥義、實物を放れざれば甚だ卑し、放れて放れず、放

れずして放る、天地無窮の趣味を畫き出し、以て詩人の高趣を托するなり。鹿角の樹に代赭の點を施せば秋景の蕭殺立どころに出來、米點もて全幅を塡むれば、夏山の翠陰見るまに顯はる。春景には草の汁を染め、冬景には薄墨もて空と水とを染む。細長き鼠の尾を五六本畫きて幽谷の佳人たる蘭蕙となり、介字七八箇を畫きて二三本の棒を引けば、直ちに清逸の君子たる脩竹となる、枯木竹石は何よりの風趣、山房訪友は第一等の畫題なり。線に力を入るれば野卑となし、夢の如く淡ならざれば下等となす。間拔と高尙は誤解せられ、懶惰を風流とするは恰好の言ひ拔けたり。書畫會席上の醉墨、一時間に十數枚、最も妙韻のある處とせられ、畫には關係なき古人の詩など太々と書き付けて、書畫一致、妙至れりと嘆賞す。落款の上下に捺印するは畫家の一仕事なり、石印を多く持たざれば早速其品格に關係を及ぼす。狩野の鶴龜は、文人の四君子たり、彼方の岩山は此方には草山となる。口字やうのものを重ぬれは馬牙皴となり、八頭芋を重ぬれば雲頭皴といふもの出來す。人惡口してツク芋山水とす、亦故なきに非るなり。總て無責任なること、氣樂さ加減譬ふべきなし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此文人派は狩野派に烈しき反動を有せり。互に兩極端に走りて相賤しみ、相謗りたり。古人の範圍内に在りて古人の手段方法を覺ゆることを畫事と心得たるは、兩派共に同じ、只一方は職人的なりしと、一方は餘り無責任なりしとの差あるのみ。然れども思想上に於て、文人派には頗る風流の趣を得たる人なきに非ず、草々書き去れる間、無量の感を含めるもの稀に之れ有りしなり。

此兩派の間に立て、其中を取り、新式を試みたるものを、文晁派と丸山派(こゝには四條派をも含む)とす。丸山派は寫生を務め、文晁派は南北兩派を折衷せり。技術より見るに、此兩派の祖たる文晁と應擧は非常の豪傑と稱すべし。文晁が濃淡、彩色、筆畫上の工夫は、獨得の力頗る感ずべく、應擧か花鳥寫生の心勞は誠に賞すべし。倶に眞面目に自己を中心として、一方には古人を學び、一方には天然を察し、潛心技術に從事せるは、彼等の時代に在りて實に容易ならざる事にして、他派の碌々として古人の糟粕に安んずる輩と同一に論ず可らず。光琳派の祖、光琳の如き模樣畫上の豪傑にして、其天才實に驚く可く、土佐派の彩色と、狩野派の墨畫の間に、一種の妙を顯はしたり。降て渡邊華山の如き、菊池容齋の如きも、夫々勝れたる天才を以て自己を畫ける人々なり。然れども是等豪傑の後を繼げるものに及びては、同じく世の大勢に壓せられて、追々に腐化し終んぬ。

是等の弊は獨り畫事に於て責む可らず、德川家の政策として因循退守を取りて、進取勇往の氣を出來得るだけ壓伏せし事の、自然繪畫社會にも及ぼして、畫家の精神を沈澱せしめし事、只歎ずるより外なきなり。口、風韻を唱ふと雖ども、筆墨をいふと雖ども、活死を論ずと雖ども、彩色を說くと雖ども、畫題の高卑を講ずると雖ども、古人の妙を贊美すると雖ども、自から省みて歸着する處を知らず、空然漠然として筆を執り、法を講ずるを如何にせん、何の爲めに畫を作り居るやを僅かに自覺せざるを如何にせんや。徒らに局部に拘泥して、精神上にも、技術上にも、大なる不具者なりしなり。恰も所謂儒者が訓詁註釋を以て己が務とせし如く、自己なるものは寸毫も生長せざりしなり。恰も骨董屋の店の如く、全幅古物の銹び腐りたるもの、陳列に過ぎざりしなり。

明治の初め、社會は極端より極端に走り、事物皆新らしく創

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

造せらるゝの觀ありしと共に、舊來のものは盡く打破せられたり。繪畫界の主權たりし狩野派は最も悲しき境遇に陷り、其畫家は細き烟りだに立て得ぬ迄に擯斥せられたり。元信法眼の畫ける金屏風は燒かれて、黃金のみ殘さるゝ有樣にてありき。晴湖（彼女は實に儁傑なりき）一派の畫風が勢力を得たると同時に、世は西洋崇拜となりて油畫の流行は始りぬ。拙陋なるにも關せず、美術々々と賞贊せられて、繪畫は油畫より貴きものなきやに思はれぬ日本畫工の多くは何の故とも知らず其後に從て、鉛筆を撚り「パレット」を握ることゝなりぬ。此大潮も何時しか過ぎて、大干潮と變り。國粹保存とか申す主義大流行となり、遂に博物館内の油畫は除かれ、西洋彫刻は取り去られて、物置の片隅に押籠められ、洋風美術は日本の特色を蠱毒するものとして、其跡を絶たしめんと迄脅嚇せらるゝことゝなれり。

日本畫なりとて今迄の儘にて宜しきには非ず、遠近の割合などは餘り違はぬ樣にすべし、隈も成るべく光線に隨ふがよし、狩野派が一番よいとフェノロサのいひたれば、是を根據にして美術の發達を謀らんとは美術學校派の主張する處なり。何でも日本畫程よいものはなし、赤鬚の眞似はすべからず、純粹でなければ、西洋人は反て好まぬ、そこが日本の國粹である、遠近法とか、光線とかは、それは西洋畫のことにて日本畫にはあらずとは、保守派の主張する處なり。是も西洋人が日本畫を褒めたるより始まり、それに繼て或一種の學者が雷同したれば、畫家は轍の鮒の水を得たらん心地、息吹き返して、此說を奉じ、彼等の後に從ひしなり。

斯くて昨年シカゴ博覽會の開かるゝ事となれり。此時こそ日本美術を世界に廣め、西洋人の大喝采を博するの一大時期なれとて、政府は非常の奮發をなし、優渥なる保護を與へて畫工を指揮し、獎勵せり。今迄の如き一夜細工の小幅にては西洋人の氣に入る可らず、大作とて何でも出來るだけ大きくして澤山物を畫き、細かく綺麗に染めて、三月も四月も費すべし、掛圖にては賣れ口悪しき故、額面にせよといふやうなる譯にて、諸大家が冥加に餘れる大喜悦、御役人の御命を奉しての一生懸命、草稿を持ち行きては西洋通の繪畫掛委員の指揮を受け、今迄畫きたる事もなき畫樣に、一世一代の熱血を濺ぎて、偖てこそ追々出品せられたるなれ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

朝鮮宗教の將來

布川靜淵

日清干戈を交へてより、朝鮮の問題は、太たく朝野の視線を惹き、或は政治の改革に、或は敎育の普及に關し、幾多の志士をして苦心計畫する所あらしめたり。そが中に特に注目すべきは、彼國の布敎に關する運動是れなり。

抑も朝鮮の宗敎とは何者ぞや、其の歷史は如何に、其の現狀は如何に。余輩は之を知らんとを力めたり。蓋し宗敎の現象たる、其の性質により、其の發達の程度によりて、民心の如何を推知するとを得べければ也。然れとも余輩不幸にして、未だ彼の地を蹈まず、故に之を論するや、推測に止まりて、肯綮に中るもの少なきを憂ひ、未だ嘗て之を言はざりき。頃日少しく思ふ所ありて、此篇を草す、必ずや杜撰の誹を免れざるもののあるを知る。但し其の詳細なるものに至ては、他日親しく之を觀察し、讀者に其の實狀を報するの榮を得んとを期す。

(一)朝鮮の開導上、宗敎の改革及利用

宗敎なるものは、一種の社會的現象にして、人生社會の必然の結果なり、されば其の要不要の如き、素より論ずべからず。宗敎の無用說を爲す者の如きは、唯、偏僻なる抽象的觀念を逌る輩にして、一種の獨斷に止まる。苟も社會の歷史を考へ其の性質を辨する者は、斯の如き愚說をなさゞるなり。余輩は唯、宗敎上の改革を說く。蓋し宗敎は社會に必要なる者にしあれば、必すや先つ之を改革して、社會の進步に伴はしむることあるを要すればなり。

朝鮮の事情に通曉し、其の實情を看破するものは、必す先づ朝鮮人民の精神上の改革に心を注ぐ。官制の改革、財政の調整共に之れ國家の運命に少なからざる關係を有すと雖も、民心衰頽して獨立の氣慨なく、風俗壞亂して士氣振作せずんは、制度文物の摸倣の如き、抑も何の用をかなす。然り朝鮮人民の精神上の改革、換言すれば道德の進步を要する所以は、既に彆眼の士の認むる所となれり。然らば如何にして、之を開導せんとするや。敎育の普及か、宗敎の改革か。余輩は兩ながら之を要すと信ず。敎育の事に至ては既に、世論、囂々たり、宗敎の事に至ては未だし。世上朝鮮の開導を望む者、何故に宗敎改革の必要を認めざるや。

人或は云はく、宗敎は主觀的の者にして、個人の意志上に影響する者あるも、社會の上に影響する者なしと。とは一理なきにしもあらずと雖も、既に個人の意志に影響あるを認識せば、社會に影響するものなしと斷ずべからず。蓋し之れ取るに足らざるの說なり。

其の國民にして寂滅爲樂の宗敎を奉ぜんか、其の國民や憐れむべし。彼等は國土を擧げて寂滅せしめずんは止まず。其の國民にして活動進步的の宗敎を奉ぜんか、其の國民や祝すべし。彼等は彼等自身の國土にのみ滿足せず、世界大の國土を爲さずんば止まず。國家衰頽して厭世の哲學起り、社會腐敗して寂滅爲樂の主義流行す。又厭世の哲學起りて、國家衰頽し、寂滅爲樂の主義流行して、社會腐敗するとあり。宗敎豈に撰擇する所なくして可ならんや。

何故に朝鮮の宗敎、改革の要あるか、何故に彼地の民心改革上に、宗敎の必要あるか。云はく、

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

朝鮮の衰頽せる所以の者は、彼等人民の精神腐敗したるに依るもの多し。豐太閤の征韓大凡八年間に渉りて、八道至る所廢頽に歸したる如き、至大の影響を與へたるは素より明白なり。近時大院君の暴政の如き亦其の一因たるは疑を容れず。而かも此等の原因によりて、衰頽したりとするも、此民自由を愛し獨立を好み、正義を蹈んで敢て恐れざるの氣慨あらしめば、豈に今日の如き衰頽を來さんや。精神既に腐敗す、何ぞ能く社會の進歩を望むべけん、社會既に腐敗す、安くんぞ政治の壞亂を防ぐべけんや。

要は精神の改革にあり。然れども朝鮮社會の歴史を察するに彼等は嘗て一種の宗教に化せられしとありと雖も、未だ形而上學的の思辨を弄したることなし。之を以て朝鮮の近時、外交を始め文明の空氣に接觸するも、日本の如き支那の如き轍を蹈むことなく、かの所謂開化黨も保守黨も、目醒ましき運動なく、殆んど無神經なるが如し。此時に當りて民心を提醒せしめんと欲せば、必ずや先づ其の社會進歩の程度に應する處置なかるべからず。之を以て近世科學的知識の如き、彼等に對しては寧ろ過激に渉るの恐れあり。且つや單純なる知識の普及は、人心改革上に著るしき影響を與ふるものにあらざるをや、故に感情を利用して能く、其知識を受け入るゝの程度に進歩せしむるを要す。換言すれば十九世紀の新科學、新器械を利用せしむるの要素を造らざる可からず。之を造らんと欲せば其の社會進歩の度を察して、國民の感情を激昂し、士氣を養成するを要す。之れ社會進歩の順途にして、如何なる社會の進歩も之に則とらざるべからず。

宗教利用の要は則ち此にあり。宗教は或る點より見れば至大至高の深遠なる旨趣ある者にして、之を利用すと云ふことは宗教家の最も忌む所なるべしと雖も、又或る點より察する時は、社會改良上、或る種の宗教を要するとある也。人或は此論を以て宗教利用説と評せんも、余輩は敢て變へざるべし。然り而して宗教の利用によりて、國民の感情を激昂し、民俗を矯正し、獨立の氣慨あらしめ、精神發揮の動機となるとありとせば、宗教や撰ばざるべからず。

然からば朝鮮の宗教とは、如何なる者ぞ。果して改革するの必要あるや否や、乞ふ左に叙する所を見よ。

（二）朝鮮に於ける過去及現在の宗教

朝鮮の歴史を案するに、今より五百有餘年前、即ち高麗の一代は、佛教の尤も隆盛を極めたる時代にして、國王も佛教に歸依し、八道至る所に大伽藍を見ざるなく、所謂佛教國なりき。然るに恭讓王の頃に至り、宋儒程朱の學行はれ、李朝代つて現今の新朝鮮となるや、佛教太甚しく排斥せられ、朝庭士大夫の風習は素より其の喪祭の禮に至るまで、悉く儒教の主義を取りて佛教を一掃し去れり。

然らば現今の宗教は、如何なる者なるか、余未だ彼地を蹈まず故に余が觀察を報ずると能はず。乞ふ彼地に滯在して、親しく之を視察したる先學の言に聞かん。

革堂長井君は、朝鮮に志を厲し「孤身これに投じ、これが爲めに窮し、これが爲めに達し、或はこれが爲めに万死の境に臨みたる」氣慨の志士なり。曾て本紙上（第三百九十四號）に「朝鮮開革論」を寄せられし中に、云はく、

「昨者「評論」を閲し、其の日本人海外傳道論に於て、三たび反復す、余輩曾つて井上伯が、本願寺をして二十万金を抛つて朝鮮に於ける佛教大本山の地位を買はしめんとしたりしを知る。佛教中に含有する眞理の固より尊むべきに係はらず、其現狀に於て、改革若くは獨立等の事業精神に於て渉るところなきを見ば、この策の成敗は、余輩の痛痒を感ぜざる所、只夫れ基督教傳道に於ては即ち全くこれに反するものあり」と。

こは革堂君が公平に吐露されたる言にして、能く肯綮に中れ

るものなるを信ず。君又、儒教に就て云へるとあり。盖し儒教は朝鮮の現時の國教とも目すべきものなり。

「人或は彼邦の儒教國なるを以て、其の四維五常尚存するものあるを疑はむ、然れども是れ我邦の儒教を以て彼れを忖るの誤りのみ、我邦の儒教は言ふまでもなく日本化したるもの、儒教の彼邦に在る、其の陋陋、我邦の禁兇祈禱を事とする下等神道と撰ぶなきのみ」と。

更らに余輩は、他の士に聞かん。東邦協會が信任して、朝鮮探撿の事を托したりと云ふ、理學士、金田楢太郎君は、「朝鮮探撿の結果」を談じたる中に、云はく、

「朝鮮には國教なし現今如何なる宗教が最も盛に行はれたるやを見るに一の盛なるものなく中には耶蘇教の信者も少からずと云へり然れども昔時佛教が此國に於て至盛の時代ありしは其寺院の非常に多くして且つ宏壯なるを以て之を推知するを得べし現今佛教の信者は皆な僧侶となりたる者而已にして普通人民は殆ど無宗教と云ふの適當なるを見る然るに人病あれば必ず神に祈るこそ可笑けれ(固より十分なる醫者はなし)而して其所謂神とは如何なるものなるか偶像も有らざれば神なる者か果して如何なる者なりやと云ふの思考もなし只日本にて所謂庚申塚の如き路傍の一里塚に至り石を積上げて着物の一片をくゝり付け祈禱するものあり又た巫子をして病人のために祈禱せしむるとあり巫子は只病人の周圍に於て神樂を奏するのみ」と。

金田君は、地質學專修の士なりと聞く、又君か主として研究したるは朝鮮の地質、及び地理等にありと云ふ。さればにや、君の宗教上に對する觀察は單に外形に止まるかの憾みあり。彼等が禮拜する其知らざる神の性質を、深探されざりしこそいと惜しけれ。而かも眞面目なる此言、余輩、之を信據するも可ならんと信ず。

更らに一歩を進めて、他の士に聞かん。如四居士とは、余未だ誰たるかを知らず。而かも渡韓して親しく人情風俗を視察せられたるものゝ如し。居士曾て「二六新報」上に朝鮮の事情を雜記し、更らに綴上して、小冊子とし「朝鮮雜記」と名けて上梓せり。中に云はく、

「彼等が崇拜する所の儒教を見るに、是れ亦殆んど名のみにして、各郡各縣孔子の廟を建て、時に釋奠の禮を擧ぐるに過ぎず、村夫子は自ら儒者と號し、兒童に課するに論孟を以てすれども、學淺く識なくして、僅に朱子の集註を金科玉條と心得、退溪栗谷の兩子を仰て、古今人相及ばずと歎ずるに止まり、朱子以外に一機軸を出したるものなく、又朱子以外に英傑の儒者ありしことを知れるものなし、故に冠婚葬祭の制式に至るまで、皆唯其制を當用し、我國は儒教國なりと、傲然として人に誇るに過ぎず、其尚ぶ所は儒教なるべしと雖も、唯其表相虛禮を事として、實躰道德の源を究むるとなし、而して國内一の碩儒なく、一の博識なく、彼の邦の道德萎靡して奮はざるは、敢て疑訝すべきにあらざるなり、平安道平壤の大學の如きは、冕冠を被むりたる數十の老書生相會して、孔子時代の教育を摸擬するの一劇場たるに過ぎず、甚だ笑ふべしとなす、其他道士といふものあり、深山幽谷に居を搆へ、草根木皮を食ひ、露を飮み霞を喫して、自ら神仙と稱すれども、是亦吉凶吝悔を說て、愚民を欺く奸猾の輩のみ、固より國政に關する勢力を有せず」と。

儒教既に斯の如しとせば、佛教は如何に。是れ亦前者と異文同義にして居士は前者よりも更らに、佛教の腐敗せる者あるを說けり。然らば我邦より傳教する佛教は如何に。居士は實に左の如く報ぜり。云はく、

「在韓本邦の僧侶は、實に不熱心なり、不勉强なり、彼等の中一人の韓語に精通せしものあるか、一人の韓人を感化せしものあるか、余唯彼等の居留地人の死沒せし時、棺後に隨つて野邊送の相伴をなすを見たるのみ、檀那の供佛に精進料理の相手たりしを見るのみ、嗚呼何等の不熱心ぞや佛陀若し之を聞かば何とか云はん」と。

以上抄出したる所によりて、讀者は韓國現時の儒教佛教は、果して如何なるものなるかを推知するを得べし。抑も宗教上の視察は素と、外形によりて容易に斷ずべからず。故に寺院等の多少によりて盛衰をトすべからざる者なりと雖も、右に抄出したるものゝ外、更らに幾多の志士が探撿したる所に聞き、又更らにグリッフィス、ローエル等の著書によりて案ずるに、朝

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

鮮現時の儒教佛教は、確かに宗教としての光輝なく、其の本分を盡さゞると明白にして疑ふべからず。

基督教(天主教)の狀況

基督教の朝鮮に於て始めて、傳道せられしは、天保三年の頃、今より六十二年前にして、西暦千八百三十二年、佛國巴里外國傳道會社の着手に始まる。天保七年に於ては其の信徒大凡六千人に達し、翌年に於ては九千人以上に達したりと云ふ。(グリッフィス)(朝鮮史參考)其の後ち漸々傳播して、朝鮮八道、至る所として該信徒を見ざるなく、其の勢ひ當るべからざるの運に至るや、彼の大妖魔、大院君李昰應は、今より二十餘年前に於て、該信徒大凡二十万人を慘殺し了せり。此時や東洋の天地、最も排外的精神に充されたる時にして、支那天津の民亦、佛國の宣教師を殺し、禮拜堂を燒失したりき。

備考。華堂君曾て大院君の事を記し、其の朝鮮の禍害となりし行爲を摘指するに當り、第一に彼か殘虐殺戮を擅まにしたることを擧げて、云はく、

「虐殺の著名なるは、朝鮮の俊傑洪鍾三、南尙教、李身逵等を始めとして、西教(天主教)信者數千人を捕へ、或は之に車裂し、或は之を斬殺し、具に慘虐を極めたるに在り。此際朝鮮に於て無辜の良民暴殺に罹る者、無慮万人に超へ、就中、國事の改良更革に心を用ひたる有爲の人物にして、天主教徒と往來せる故を以て、徒らに慘毒に陷りたる者、鮮からず、我日本幕末に於て安政戊午黨人の獄を起し一時の忠良名賢を羅織して之を殺害殺戮したる者に比すれば、此時李昰應の虐殺濫刑は、殊に其大甚しきを見る、當時濫殺に罹れる者、男女老壯の屍骸を京城水口門外に棄て、堆積すると山陵の如く、聞く者震ひ慄れざるはなし」と。(此事件に關しては、尙ほ、山中峯雄君の「大院君傳」を參考すべし)

然れども佛國宣教師等は、毫も挫折せず、之れが爲めには、戰爭を惹き起し、之れが爲めには、身躰髮膚を慘殺せられしにも拘らず、今尙ほ傳道して止まざるなり。特に此に大書すべきは、彼等が社會的事業即ち施病院の如き、貧民教育の如き、孤兒の救助の如き事に盡力すると之れなり。華堂君が、朝鮮にある佛教が改革若しくは、獨立等の事業精神に於て渉るところなきを嘆じ、「只夫れ基督教傳道に於ては即ち全くこれに反するものあり」と云ひ、如囚居士は非基督教主義の人なり、其の韓國に於ける佛教振興策を論ずるの士にして、尙ほ外國宣教師等の確志動かず、熱心當るべからざるを嘆じたるを見れば(朝鮮雜記參照)、更らに又、宗教上に注目せざるの士にして尙ほ、耶蘇教の信者の數も少からずと報ずるものあるを以て見れば、天主教の狀況稍推知するに難からじ。

(三)朝鮮に於ける將來の宗教は何者ぞ

前述する所は、朝鮮現時の宗教の狀況なり。余は其の悉く信ずべきや否やは、他日親睹して、斷定するの外なし。然れども多くは之れ、彼地に志を屬して親しく見聞したる所なりとすれば、余輩は言外に其旨趣を求めて、大に悟覺するものなしとせんや。乞ふ少しく說かしめよ。

朝鮮の開導上、宗教の改革利用を要すとせば、如何なるものを改良すべきや、如何なる者を布教すべきや、即ち現に行ふべきもの、將に來らしむべきものは、果して何の宗教なるか、之れ至要の問題なり。世人が是等の問題に關して、殆んど冷眼視するは、嘆ずべきかな。

(い)佛教の傳道は不可なり

井上內務、全權公使として渡韓の途に就けり。伯曾つて二十万金を投じて、朝鮮に於ける佛教の大本山の地位を買はんとしたるの勇氣、如今尙ほ存するや否や。余輩は全然佛教の傳道を不可とするの愚を學ばじ、余輩か不可とするの理由蓋し少なからざるか爲めのみ。何ぞや、

第一、宗教家としての人物—。我が邦佛教の寺院少なしとせ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ず、佛教徒中に學者又少なからず、佛教贊成家なる者、亦有力ならずとせず。然れども佛教の本旨を奉持する、宗教家としての人物、果して幾何かある。余輩か所謂宗教家とは、學者にあらじ又物識りにあらず。能く其の宗教の開祖、高僧、使徒の行爲、若くは其の教理上の眞理を奉躰して、身之を行ひ温かなる同情を以て、人生社會と交涉し、害惡を排斥する氣慨あり、且つ社會の爲めに熱烈の感情を以て道德進步爲めに活動するもの之れ也。さるに我が佛教徒中には、余が所謂宗教家としての人物太甚僅少なるを如何せん。佛教の青年等には田舍の片山里の寺院よりはる〴〵と東都に遊びて、哲學修業等するもの多く、佛教の雜誌新聞亦、談理を以て本職とするの事實は、掩はんとするも得べからず。宗教家は哲學者たるを要せず。哲學の如き修業は學者に任じて可なり。然るに佛教現時の狀況は、確かに哲學化し、佛徒亦哲學者染みたるの現象は、佛教の爲めに不幸なるのみならず、國民道德の進步に對して、毫も賀すべきことにあらず。此傾向と此現象は、遂に宗教家としての人物に欠乏を來したり。宗教上の哲理を論ずるに當りては、乞ふ佛徒と相ひ談ぜん。而かも人心改革の上に於て、獨立精神の養成上に於て、社會的事業の交涉に於て、彼等は實に力むる所なきが故に、余輩は朝鮮の現狀を察して、之を取らず、唯夫れ宗教家としての人物輩出し、先つ我國內に於て改革する所あらば可也。

第二、社會的ならず—。佛教と云ひ耶蘇教と云ひ、人生社會の事業に交涉する所ありて始めて、其價値ありと云ふべし。宗教は社會の爲めに存するもの、若し夫れ社會的傾向を排除することあらんか、とは宗教としての價値なく、光なきもの也。試みに佛教と社會の歷史との關係する所以を一見せよ。社會進步に對して少なからざる關係あるは、素より疑ふべからず。而かも現狀に於て、彼の禁酒會、孤兒院、貧民教育、慈善事業等の矯風的事業に於て、彼等果して何事をか爲しつゝある乎、一種獨斷的の人生觀、世界觀を爲して、之れが修養として哲學を學ぶも、却て人生社會を學ばじ亦之が爲めに、活動せざる所以のものは、教理上の然らしむる所ありと雖も、抑又宗教家たるの本分を忘却したるによらずんばあらず。山間寂寥なる所、悽愴たる伽藍の中に觀念修行するは、唯人生社會に最も深く交涉する道德を修むるの手段のみ。然るに佛教徒多くは、手段と目的とを混じ、昔日形而上學的思辨の螺堂に入りたる迷夢未だ醒めやらざるなり。若し夫れ一旦醒覺したる後に於ては可なり。然れども現時の如き彼等をして、渡韓せしめば、前述せる如く、居留地人の死沒せる時、棺後に追從するの擧動あるに過ぎざらん。朝鮮の佛教は已に、我邦よりも衰頽して見るべきものあらざるに際し、更らに此傾向と性質を帶ぶる我が佛徒を派すること、極めて不可なり。要するに我が佛教の傳道は、餘りに個人的修養に力むるが故に不可也。社會に交涉すること深大ならざるが故に不可也。學者としては知識普及に要あらん。宗教家として感情の激昂し、熱烈の氣慨ある人物に乏しきが故に不可也。朝鮮の開導上最急の事業は、彼等人民をして獨立の氣象を養はしめ、精神の根底に交涉して、改革を欲する念慮を保持せしめ、之を開導するにあり。我が佛教徒、能く之を爲すことを得る乎。

（ろ）儒教の傳道更らに不可なり

儒教は一種の道德系にして、宗教にあらじ、特に我が邦の儒學者にして、之を傳道するの企圖あるを聞かず。されば之を論するの要なきが如し。然れども余輩は之を改革するの必要を認む。儒教の傳道は不可なり唯之を改革するの要あり。何が故に之を改革するの要あるか、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第一、事大的精神の排斥と獨立的精神の養成―。朝鮮に於ける佛教の布教上、右に述べたる者の外、他に障害となるものあり。即ち嘗て壬辰の役に我兵を京城に導き入れしは、當時の僧侶なりとの嫌疑あるを以て、京城内に僧侶の入るを禁ずるの制あり、且つは國王佛教を奉ぜさるが故に、新らたに寺院を建立するを禁じ、唯舊寺を再興するに止むるが如きと之れ也。而して國王を始め士大夫に至るまで、冠婚喪祭悉く儒教に則とるなり。然るに爰に改革の要ありと云ふは他なし。儒教の本山は支那國なり。豐太閤の征韓の影響、韓人をして震ひ恐れしめしや靡然として、支那に依るの精神を惹起し、正朔共に奉事し、自ら小華と號し隱然屬國を以て、自ら居る所以のものは、最も我が朝野の志士をして憤懣に任へさらしむる所。此の事大的精神を養成したる國民をして、獨立の氣慨あらしめんと欲せば、先つ支那に依るの精神を減せしむるに若かず。然るに儒教を以て現時の狀況に止まらしめば、朝鮮の獨立や期すべからず。抑も政治上に於て、財政上に於て獨立したるの觀あるも、思想上に於て、依立せば忽ちにして政治上の獨立も亦消失すべく。是れ實に見易き道理なり。

備考。革堂君嘗て云はく、「朝鮮の獨立は、支那の忌む所、即ち日本たるもの、朝鮮をして政治上に獨立せしむると共に、思想上支那に對して反抗亭立するの力を與へざるべからず、朝鮮人は、政治上に於ては固より自國の自主を信ず其の支那に屈從するは、全く思想上の關係に屬し、孔孟の道に於て本山なりとして、これに敬事するもの、而して支那は全く羅馬法皇を以て居る」と。

更らに朝鮮人自らをして云はしめよ。大院君嘗て云へるとありと聞く、「敝邦今日の急は、人々廉耻の心あらしむるに如くはなし、人々義方を知る、國亦自ら立つ」と（本紙三百九十四號參照）韓の判官呉容泰、我が探撿家某に談じて曰く、「今我國をして貴國の如くならしめんには、人々の腦髓を入れ替へ、一個獨立の氣象を養成せざる可からず」と（東邦協會報告朝鮮紀行參照）是等の言、屢々之を聞く所の者にして、決して珍らしからず。而かも彼等自身の言として之を見ば、其廉耻心の養成、其獨立心の發揮、これ確かに彼國有識家の期望ならずとせんや。而して此期望は實に朝鮮に於ける儒教の改革にあり。彼國儒教の改革は、宛ながらルーテルの宗教改革と敢て異ならざる勞力を要すべし。

第二、儒教の本旨を咀嚼するの能力なし―。儒教は或る點より之を見れば、所謂支那哲學の錚々たるもの。而かも之をして美果あらしめたるものは、万國史上、唯我日本あるのみ。支那は儒教の本山たりと雖も、支那社會の實際の道德如何を見來らば、之を以て儒教國と名くるを得ざるものある也。仁義五常の道、彼等全般の社會に浸染したりと見るは、古代の儒教の教理を崇拜すると、支那社會の實狀の現況を察せざると我國に發達せる儒教的影響を以て、彼を推測するの誤謬とに坐する者のみ。「朝鮮の佛教は、日本に似ずして支那に似たり。」（グリッフィス朝鮮史參考）其儒教も亦日本に似ずして、支那に似たり。支那既に腐敗す、之と均しき朝鮮の宗教、如何でか純潔の美果を結ぶの理あらんや。而かも支那に於ては、儒教の教理學問は著るしく發達したりき。彼等は形而上學的思辨の時代を踏み來れり。更らに進一進せば歐洲文明の新空氣を入るゝこと易々たらんのみ。其の之を爲さゞるは、昔日の思辨的空想の未だ醒めやらざると、一種思想上の弊毒の浸染し來りて、支那社會の退歩したるに座するのみ。

朝鮮に至つては然らず、其の歷史を案するに、宋儒程朱の學隆んに行はれたる時代ありと雖も、彼等の中には、一新機軸を立てたるものなく、唯我が昔時の或る漢學者の如く、英雄崇拜的に之を信じ之を註解したるのみ。朝鮮は實に未だ、形而上學的思辨の時代を踏まざるものなり。試みに我德川時代の思想變遷史を案ぜよ。儒教は僅かに日本化したるなり。彼等朝鮮の學者は、未だ儒教を朝鮮化せず、又形而上的思辨の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

絶頂に達したることなく又封建と云ふ時代を踏まず。こは彼國の歴史に徴して明白なり。
然れば儒教の本旨を彼等に傳へ、又之を盛んにすることは、假令之を能すとするも、彼等悉く之を朝鮮化するの能力、現時に於て之れなし。故に我が下等神道の如き朝鮮の腐敗せる儒教は大に改革せざるべからず。而して何を以て之に代へ、如何にして改革すべきか、之れ實に至要の疑問なり、志士一日も看過すべからず。

（は）朝鮮將來の宗教は基督教ならん

余輩は論じ去り論じ來りて、今や端なくも朝鮮宗教の將來に及ばんとす。余輩は彼の國現時の宗教を叙し、併せて佛教傳道の不可を論じ、儒教の改革せざる可からざる所以を説けり。抑も將來に於ける朝鮮の宗教は何者にや。
余は世の所謂、宗教家に非ず。故に佛教に對し基督教に對して、敢て詭辯を弄し、若くは彼を誹り此を斥くることをせず。余輩は又不肖にして、世の所謂基督教徒と悉く信を一にするものにあらず、唯社會道德の進歩に交渉し、人生に安心立命を與ふるの宗教に與みし、其の宗教の隆盛ならんことを望むのみ。佛と耶と我れに於ては、謹んで善所を採り、共に之を發達せしめんことを欲するに外ならず。
余輩は現時朝鮮の開導に就きて、幾多の志士が計畫するものあるを聞けり。そが中に基督新教徒の有志先輩が、海外傳道會なるものを組織し、本誌の編者は又大に之が爲めに力を致さんとすることあるを聞けり。余輩之に就きて更に復深思する所あり。遂に案を打つて、此の基督新教徒の海外傳道の旨趣を賛成せり。余は宗教家にあらずと雖も、有志既に此擧あり。我輩爰に一言を呈せずして可ならんや。

我邦基督教徒の海外傳道、果して何等の必要あるか、乞ふ少しく述べん。
第一、**基督教と社會的事業**。―佛教を論じ或は基督教を論ずるに當り、之を哲學上よりするものあり。宗教を以て人心に根底するものとし、必須の社會的現象なりとすれば、哲學上の論辨一應必要なきにあらず。然れども悲ひ哉、東西の哲學者猥りに哲學上によりて宗教の根底を究め、其運命を計ることを力め更らに社會學上より論斷するもの稀なり。否な哲學者之を論ずこと稀れなるにあらず、唯之を論ずること偏僻なるもの少なからざる者あるのみ。余輩は宗教を以て哲學上より論ずると共に、更らに人生の歴史と、社會組織の上より論せんと欲するものなり。
されば、或る宗教の教理が、如何に哲學上より深遠の眞理を含有するを認むるも、單に之を以て宗教の價値を是非することを好まず。例へば佛教の如き即ち是れなり。佛教上の哲理は高遠なり、現時の佛教家が哲學者染まんとする現象を見るも、實に其の教理の深遠なるものあるに基するを認む。然れども前述せる如く、宗教は宗教にして哲學科學にあらず。此點より察するときは、我が基督教の士が最も社會的事業に交渉する所多く、感情優美にして慈善心に富めるものあるを認む。其の教理上、哲學より之を見て或は淺薄なるものあらん。而かも社會學上より、人生の歴史、人心の活動に交渉するもの多きを認めば、其の勢力や一種の社會力にして、最も注目すべきものならずや。歐米に於て多少、學理上より排斥するものあるに拘はらず、其の運動や、我が佛教徒の如くならざる所以のものは、彼等か社會的事業に從事するが故なり。見よ我邦に來れる外國宣教師の説く所、學理上より淺薄なるものあるは疑ふべからず。而かも明治時代に於ける社會史を觀るの

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

眼光あるものは、彼等が慈善事業に影響したる事實を、看過することを能はず。例へば女子教育、孤兒院の設立、禁酒禁煙の會合、廢妾廢娼の運動、青年子弟の教育等に於て、少なからざる皷動を與へたり。日本の該教徒之に感化せられ、今や能く其の教理を議論する等のことを專一とせず、却て、宗教家たるの本分を盡し、外國宣教師の手より獨立して社會慈善事業に從事しつゝあり。蓋し是等の現象は其の宗教の價値勢力を論ずるに當り、一種の標準とすべきものにあらずや。

朝鮮に於ても、基督教徒が施病院を立て、貧兒の教育に從事する等の事實は、非基督教徒をして屢ば嘆稱せしむるものあり。宗教の勢力は此社會的事業に交渉するの多少に依て、推測すべし。余は此標準によりて、日本基督教徒の遙かに、佛教の徒に優れるを認めずんばあらず。彼の偏僻なる哲學によりて、宗教を是非するものゝ如きは、未だ共に宗教の改革を談ずるに足らず。人生社會の進歩を企圖するに足らず。哲學の理屈は唯學者の閑事業に任すべし。活社會は活動するもの豈に死せる教理の深淺に拘泥して可ならんや。之を以て余は日本基督教徒が朝鮮に渡り、先つ宗教として傳道すると共に、更らに今日基督教徒の特色とする、社會改良的事業に從事するの力と性質とを有するを信ずるが故に、余輩は將來の朝鮮の宗教は、基督教ならんことを認めずんはあらず。

第二、宗教家としての人物。——宗教の盛衰する原因、種々ありと雖も要するに宗教家としての人物が、其の宗教社會に多く存すると存せざるとによる。教理の如何は暫らく之を措き我邦に於て宗教家として世上に立つもの、佛耶何れか多き。余輩は哲學者らしき、佛教家の少からざるを認む。然れども社會的事業と交渉する宗教家は少くとも基督教徒の間に求めずんばあらず。朝鮮の現時は改革を要する時代なり死せる學者的宗教家、何等の要かあらん。彼等に獨立の氣象を養はしめ、廉耻の心を持せしめんとせば、先つ感情を激昂せしめざるべからず。故に感情的に富む宗教によるを要す。觀念修行は未だ朝鮮人の任ゆる所に非ず。而して之を爲すもの、日本の基督教徒の有力者に求むるを以て策を得たるものとなす。是れ余輩が基督教徒に望を屬する所以なり。

（四）傳道の精神及び其方法

有志者既に海外傳道會を組織せり、然れば其の傳道の方法の如き、自ら計畫せるものあるを信ず。然れども爰に一言を呈するの止むを得ざるものあり。基督教徒の傳道と云へば、即ち基督教を傳ふるにあるは論を俟たず、然れども先つ着手すべきは、直接傳道に非ずして、最初は教育の爲めに心を用ゐ着々傳道に從事するの策の得たる者なるを信ずるなり。評論子曾て、海外傳道論を說きて云く、

「傳道の意義を狹小に解することを勿れ、傳道とは、即はち道を傳ふるの義也、たとひ驚天の事を爲すも、其意志名利にあらば、此れ傳道にあらざる也。たとひ、動地の事を爲すも其精神、權力にあらば、此れ傳道にあらざる也。傳道とは政局に當ること、軍事に役すること、商賣に走ること、口舌に談議すること、手足に善行を爲すとの差別を問はず、すべて道を宣傳し、道を擴張するの精神意志によりて、事業を成すを云ふ」と。

而して評論子の所謂道とは、基督が顯現したる道なり。基督の顯現したる道が、社會實際の事業と交渉するもの多く、其の活動や生命あり、元氣あるを認むるもの、誰れか此事業に向て贊成せざらんや。

爰に一事の議すべきことあり、そは佛國宣教師が彼地にありて天主教を傳道することは是なり。彼等は大院君の慘虐を蒙りたるに屈せず、諄々傳道して止まず、其熱心と勇氣とに至ては、非基督教徒をして屢々、喫驚嘆稱せしむ。若し夫れ我が新教徒

は彼等に交渉して、之を保助し以て相提携すべきや否やは、今之を論せず。然れども余輩が、我が基督敎徒の傳道、盛大となりて彼等をして之に干渉するの、必要なきに至らしめんとを望まざるを得ず。想ふ、儒敎の精神と佛敎の精神とを咀嚼し、これが粋を抜き、これが敎理と歴史とを熟知し、又これが爲めに久しく養成せられたる、我が國民中の基督敎徒にあらずんば、如何でか能く、彼等の感情を利用し、彼等をして自由獨立の國民たらしむるとを得んやと。
我が基督敎の傳道は、今後朝鮮に於ける政治上より、如何に影響せらるゝか、容易に知るべからざるものあり。然れども、支那に依頼するの精神消失せば、文明の空氣に圍繞せられ、或は急激の進歩を來すとあるやも、知るべからず。唯夫れ彼等には素養なし、是を以て社會進退の動靜、到底我が國の如くなると能はざるなり。されば要は彼等の精神根底の改革にあり。此改革や、宗敎の傳道によるを以て第一とし、敎育の普及を以て第一とす。此兩者相俟つて、始めて、彼等が事大の精神を挫折し、獨立を愛好するの念慮を惹起するを得べし。
朝鮮の事たる單に我國家の自衞上より、計るべからざるものあり。旣に彼國は、東洋のベルガン半島たるを知らば、彼國の事情を審かにし、彼の民心を改革すると、目下の急務ならずや。彼國をして將來の强國とし若しくは、弱國たらしむると、一に我日本の手裡にありて存す。今や東洋の天地、殺伐として日淸の戰爭、或は惹ひて世界の一大戰爭となるやの疑念を生せしむる事情多々なるあり。實に之れ國民警醒の一大時機にあらずや。余輩不肖が、朝鮮に於ける將來の宗敎傳道を論ずる、眞に止むを得ざるものあるなり。唯宗敎家ならざる余輩の言、肯綮に中らざるもの少なからざるべし。乞ふ他日、其の實相を看取し、更らに之を論ずるの榮を得ん。

（十月十五日稿）

悲しむ人

白衣子

思ひ みだるゝ 淺茅が原 の
露 の 白玉 はら〳〵 と
落つる 涙 や 朝日 の 影 に
惠まれてこそ かわくらめ

露 も 宿れよ 涙 も ふれよ
かなしき時 には 悲しまめ
苦しきとき には くるしまめ
逃げな かくれな 血 の 雨 に

悲しむもの は 福 なり と
のたまふ 聲 を しるべ にて
さまよひ 出し 天つ御國 に
はやも からへん 主のみ手 に

縱琴行

是嘗臥病時、病中所譯以自遣者、乞讀者一笑云爾、

朝閑生

滄海無量藏珊瑚。不似佳人胸底珠。僅入家門多佳氣。董花痕牀香欲無。凶變歷倒無由避。丈夫肝腦殆塗地。恠底春閨銷魂人。厄窮不関能自致。霧穀織羅不勝裝。燕舞鶯啼屢斷腸。歲寒役始知松柏。海枯石爛節乃光。薜蘿纓綿託勁柏。蔓葉參差紛瓔珞。無端迅雷裂高枝。懸裊劍爽。吹玉液琴瑟相和雲仍滋。人間快樂寧有之。大廈方成燕雀賀。蝸廬容膝好笑嬉。窓外天惡風雨渙。綠戶沈々蝶夢衍。拏力只願遣以安。與汝不容力寸亂。我有心契禮須利。相如新合卓文君。誰謂神仙不可接。神女朝降巫峽雲。郎稱趫宮愉。想他是窈窕更快爽。歌舞塲頭喝采中。唯求阿郎一磐賞。紫鬱青鳥互相依。翠袖卷紗肉映緋。正是艷陽春三月。野花芳草一路輝。奇禍忽落自天界。万金贖去有餘債。忍使狂風打香蕊。對坐破顏强自快。但有靈犀一點通。愛眼照破阿郎衷。欲拔纖手暗中索。其奈毒箭毒更攻。溫言柔色情眞切。聽來視去腸斷絕。自是嬌喉不復歌。明眸生花花唇折。悄然明實說向予。予問細君既知與。勿爲皇天言我歸。思他容易令狂余。我言直須整心緒。卷傳到底不可禦。路人急說其心破。孰與情人怨歎語。奪却相知無量祕。莫乃兩足斷赤繩。他謂隱蔽是輕賤。輕賤隱蔽誰能驗。君言洵然君且慮。一擊可挫他先視。若知所天是丐兒。不免鬮心塗泥土。忽辭天上廣寒宮。去迷地底幽闇中。誰令彼遇斯奇阨。誰使他陷此困窮。不然永久日月私。万心賞讃万目仰。春遊事夜耽宴歡。俄然蕭索誰不惆。流暢辯去悲較轗鬱々沈默復平生。乃執前議徐慫慂。掉頭不背却傷情。生計當與地位貶。衣食可分豈可掩。思之不須徒悲傷。外物何害內心慊。汝尙有友々情恍。不以窮達貳其心。若令殢理借汝往。汝猶憔悴行且吟。如使彼作地可入樊籠之中好呼吸。是天祝彼天願憐。不禁悲愛交相集。起提手會他亦然。聽取自謂敵旗婆。爲表爲君愛君實。必應鼓力寄愛憐。天向佳人賦靈火。令之黑夜照道左。非墜礎土火宅中。誰識天使常伴我。比與有趣精神加。穿他胸腹肺腑奢。此時乘勢重勸說。終令決意去歸家。吾自激勵吾自懼。他是輕快豈貞固。一朝驚破霓裳羽衣曲。可惡秋月春風等閑度。何料聽了却欣然。溫顏愉色如神仙。笑舉雙手加頸問。郎君憂愁只之緣。來告諸予轉悽惻。可哀彼未辛酸識。讀詩只見愛接貧。始遇空乏定惶惑。君既奮發克至難。又須向世披心肝。彼唯憂他處奇變。無意對人爲吝嗇。售家郭外購小室。區々處來忙盡日。估却幾多奢侈具。只剩細君縱琴一。琴乎思之輙憶人。憶昔約成未婚辰。撥絃數聲孅又撚。恍聽妙音舞梁塵。締邈情想與切愛。令我一笑不自耐。起向新屋求孤鶯。想他役々理室內。一家情事趣味多。乞得追隨此夕過。心身漸憊行太息。哀兮瑀理今如何。彼何居乎何事起。疾視而曰茅舍徒。終日離覷服薪炊汝尙謂是無事矣。我問彼果怨間關。他言只見其溫顏。且觀溫顏見心實滿身渾愛心渾媚。於戲君何自謂貧。却是儼然富貴人。昨日未識連城璧。今日全得夜光珍。今夕一過我乃安。彼始此日嘗辛酸想應力竭神又倦。想見前途發長嘆。言稍有理不得駁。默而不語足徒蹤。路入陋巷出康衢。茅舍避塵林樾遲。蔓繞樑端葡萄繁。葉蔽屋上敷樹蔭。草園戶側瓶花巧按排。叢徑透迤當戶開柴門。忽聞琴聲漏窓牖禮須利立把我手。瑀理感切唱小歌。一曲耳人最所好。心悸手戰且近聆。步々觸礫響玲玎。玉顏瞥見須臾失。快步歡迎顏殊娫。野裝純白散銀霞。草花數朶絡雲鬟。一道紅潮上頰邊。嫣然好笑漲滿面。所愛淨爾吾甚喜汝來。翹首待汝起徘徊。屋背樹下安几卓。採集甘美幾蠻莓。々々且好乳酥美。無物不美皆在此。乃加雙手欣然親。噫嘻我翟與福祉。阿郎頑愁全服從。伸將雙腕約其胸。再接吻又接吻。感切不言感淚衝。他日向我證言數。縱然天運再把捉。一路平安行樂多。雖復瞬間當時樂。

高橋傳五郎を憶ふ

在仙臺　川合信水

北辰直下、寒風膚を裂き、堅氷鬚に結ぶ處、我が愛友高橋傳五郎君は、春秋二十有四歳を一期として、此世を辭し去りぬ、惜む者は獨り君を知る者のみに非ず、

君は身幹肥大にして頗る健康なりき、君は天眞爛熳の人なりき、君が高笑して友と語る、君が親切を盡して貧民の友となる、皆其自然の眞情より出づ、温良、親切、義俠、磊落等の性質は、君が一身に調和されたり、

明治二十六年二月、東北學院神學部教場に於て、初めて君と相見る、余は先に席に在りしに、君後れて至る、戸を開きて入るや、一友余を君に紹介す、君喜びの笑を含みて曰く『義の日、卿が此地に來らんとする由を聞きしが、今幸に相遇ふ』と、無頓着に櫛らざる五分刈の頭髪は、延びて二寸にも餘れり、襟の垢着きたる衣服、色の褪めたるゴロウの羽織、朴素なる風采、今猶余が兩眸の中にあり、

其後、君の余を訪はるゝこと屢、余が東一番町の寓に在るや、時猶寒く、雪片霏々たる日、寒風習々たる夕、君來る時は常に古き毛布に包まれてありき、余が名掛町に轉ぜし時や、君既に甚だ心安く感じ、余と共に仰臥して相語りしこと多かりき、其憂に沈める時、其厭世に傾ける時、君は來りて余に其心を洩らしたり、夫れ熱烈の情、廉潔の心は、憂に沈むこと多く、時としては深き意味に於ける厭世に傾くことなきに非ず、君を思ふ時、余は他の君を悼む人の心の外に、別に思ふ所なくんばあらず、

其貧民傳道に至りては、君の如く熱心に盡せしもの稀なりと稱す、余も一二回君と共に行きしことありしが、君が温かなる情は、彼の貧しき者の心に、如何ばかりの慰ならんかと思ひたりき、

二十六年四月三十日、君千嶋行を决す、

其夜、東二番町日本基督教會に送別會ありし時、君謂て曰く『願くは我骨を以て教會の柱となし、我肉を以て教會の壁となさん』と、

翌夜、東北學院講堂の送別會に於ては、君悲壯の躰にて、自ら南洲の詩を吟じ、以て劔舞をなせり、『秋風埋レ骨千島原』の聲は、深く余が耳底に殘れり、蓋し其『故鄕山』の三字を改めて『千島原』と吟せしは、君が當意即妙なり、余は君の爲めに送別の辭を陳し、更に又書を認めて、翌朝學院の井戸端に於て之を君に渡し、互に握手し、互に涙を以て神に祈りぬ、

同級の學生は、君と共に、院長及び教師諸君を加へて、寫眞をとりぬ、時は來り、曉の汽車は君を載せぬ、停車場に送りし雲の如き多くの人に、君は窓より頭を出して懇ろに一禮し、勇ましき汽笛の聲と共に仙臺を出で立ちぬ、

二十七年七月、忽然として君が訃音に接す、始め新聞紙によりて、次に他に來りし電報によりて、然れども余は半信半疑なりき、眞か僞か余は實に惑ひぬ、余は其僞ならんことを欲したり、而も不幸にして其事や信なりき、君が遺書、君が遺物、如何に吾人をして追懷の念を増さしむるよ、

嗚呼日本に於ける新教最初の殉教者は君なり、君の特に出發せんとするや、押川先生謂て曰く『君は洗禮のヨハ子になり給へ』と、いふこゝろは、彼の如く千島傳道の先驅たるべしとの事なり、而して其傳道に於てヨハ子の如く先驅たりしが如く、其死に於てヨハ子の如く早かりしは、抑も亦何の因緣ぞ、

君死して、君が紀念傳道會は起れり、而して君が學びし東北學院、君が寢食せし勞働會は、今有爲の人物を養へり、君が骨空しく彼土に朽ちず、君が精神益々地上に活動することを思へば、吾人豈神に感謝せざるを得んや。

小さき手帳

日本の一學生

高橋君の遺物として、小さき手帳、北海より來れり、今其中より拔書す、君、文を能くせず、且此帳面、筆に任せて順序なく種々の心覺を記するのみ、然れども其中實に見るべきものあり、

……(上略)八疊敷に一人チョンボリ静かな天國ォゝ此國こそ郡司君に與へたきもの之を與へん爲ならば余が决心はエスの十字架惴々焉唯能はざらんを恐るゝのみ烈風猛激怒濤澎湃潮流旋渦天の高きと爭ふて深く鯨鯢飛躍して舟爲めに呑まれんとするに當てや余が信仰如何なるべき預想すエスがガリラヤ湖上風に乘れるの

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

中を曠周章狼狽すべきか斷言す然らざるを囈吾弱しと雖も既に在主生くる慰吾が爲す所は主の爲し玉ふ所なり吾安んぞ見惡くき樣を演じて主エスをけがす可んや

………………（中略）………………

押川先生に教を乞ふ考也と云ひて若し會用外にて時間の餘りあるあれば自ら仙台に行きて教を乞ふべし併し鹽釜まで御出被下ては甚失禮にて且時なければ甚だ殘念に付御出の儀は御控被下度と云ふ所謙遜して自重なる益し一個の好漢たるを免れざるなり

余を見て貴方は高橋さんにて在らるゝや

私は海軍大尉郡司成忠なり

余は押川の弟子………と云ふ

自ら先づ口を開て平教會牧師に會へたるを云ひ押川先生の御樣子を伺ひたりと云ひ包みなく語れる所磊々

………………（下略）………………

記者曰く、是れ高橋君が郡司大尉の來るを聞き、先づ押川先生方に行き、轉じて鹽釜の手前なる加茂といふ處に於て、大尉に面會せし時の事を記せしものと見ゆ、大尉が先生と仙臺に於て相逢ひしは此時より後の事也。

傳道者たりし以前の高橋傳五郎君

日本の一平民

故高橋傳五郎君、族籍は青森縣陸奥國三戸郡上長苗代村大字根岸百十四番戸第一號士族なり、

君、明治四年六月十五日を以て、三戸郡八ノ戸下組町五番地に生る、父は傳四郎、八ノ戸領主南部遠江守（二萬石）に仕へ、足輕を務む、母はツナ子、君十歳にして父を喪ひ、十五歳にして母を失ふ、同胞君を合せて五人、兄姉各二名を持てり、一人の姉は既に沒し、他の一人は小林氏に嫁せり、名をりせといふ、兄歌吉、父家を繼ぐ、他の一兄は竹花惣三郎氏と稱し、千葉縣葛飾郡市川町四丁目に移住し、大工を職とす、今猶健かに暮せり、

傳五郎君九歳にして八ノ戸小學校に入る、居ること六ヶ年、中等科を卒業す、父沒して後家計寛ならず、止むを得ずして退學せんとす、森某氏あり、其子頗る學校に行くことを好まず、某氏、傳五郎君の學を好むを知る、而して又其窮するを知る、以爲く彼をして我家に寄食せしめ、我子と共に學校に赴かしめば、我子は彼によりて能く勉强するに至るべく、彼は我家によりて其學を續くることを得べし、是れ實に双方の爲なりと、乃ち君を招きて其家に置く、君親切を盡くして某氏の子を導き、相携へて昇校す、其忠情感ぜざる者なかりしといふ、既にして事情は君をして郷地に止らしむること能はず、君慨然として志を決し、己の書籍を賣却して僅かの旅費を整へ、奔て東京に出づ、時に年十五、一日、千葉なる兄惣三郎氏に面し、自己が志を告ぐ、兄氏大に之を嘉し、其大工の手によりて稼ぎ蓄ふる金を以て、毎月學資金五圓を給せり、兄氏の志亦感ずべきなり、

君學資の途を得て大に喜び、願くは軍人となりて、國家に盡さんと思ひ、成城學校に入學せり、

陸軍士官學校の試驗に應じて合格せず（躰格か）爲めに兄氏其學資を止め、旅費五圓を與へて歸省を命ず、

君歸りて米澤に在り、元川源之助氏の推薦によりて仙臺に來り、君が迹かに敬慕せし押川先生の門を叩く、先生君が人物を知り、直に許して勞働會員となしぬ、之より先き、君の東都に在るや、植村正久、嚴本善治兩君の勸めにより、基督の教を研究せり、仙臺に來るに及んで、心を決して洗禮を受く、其信仰進むに隨ひ、傳道者たらんことを欲し、願ふて東北學院神學生となる、

君の千島行を決するや、路に故山を過ぐ、嘗て君を寄食せしめし某家を訪ひ、懇ろに當時の事を謝す、某家頗る之を喜びしといふ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

樹だま集

泡鳴子

萩の露。

萩が　戀する　ものならば、
おかしからうじや　ないかいな。
待つ夜　の　月　に　覗かれて、
した葉　の　つゆ　の　耻づかしや。
かぜ　や　さはるな、あらし　よ　吹くな、
何んぼ　野ずゑ　の　身じや　とても。
靡く　こゝろ　を　なびかぬ　ふり　で、
つんと　そむけた　風情　も　かわい。
うは葉　ばかり　が　人目　の　關よ、
なさけ　知らずの　世　は　無いに。

富山大仰寺　に　やどりて。

ひとり　ぬる　富山寺　の　あらし　聽けば、
身　も　浪ぎは　に　飛ぶや　と　おもほゆ。

婦人化粧の巻(上)

山田美妙評

亦是れ一讀す可き價値あるもの、素より讀者君子をして之に倣へと言ふにあらず、依て以て一般の好尚を知るの慰さめとなすべしとする耳(編者、白)。

はしがき

この虎之巻といへるは故人中山南枝といへる女形の役者が秘し置けるものを大坂の或大家の御婦人へ贈りしものにて、先年同家御土用ぼしの時、ふるき文庫の中より出でたる物なりとて、去る明治二十四年七月に大阪毎日新聞雜報中へ數日の間連載ありしを弊店に於いて寫し取り置きしものにて、此度いづれも樣方の御なぐさみ旁茲に再び轉載いたしし物なれば、御化粧の節御ながめ下され候へば有りがたく存じ候ふ。

◉夏の化粧は隨分薄き方がよし。まづ顏をばよくよく糠にて洗ひ、充分冷まして後少しづゝ薄く延ばし、さて手に殘りしを首筋へ塗りて、耳の後ろと前は塗らぬがよし。

(評)汗のよく目立つ所を避けて塗らぬ注意は面白い。所はげて木地などが出、出來のわるい蒟蒻の白あへも是ならば出來ぬ。

◉船遊山の化粧は男女打ちまじりて兎角顏を突き合はし居るものなれば、別して化粧のむつかしきものなり。濃く塗れば髮の生へ際に白粉の境目に生地が現はれて見苦し。故に薄きを良しとす。しかし春先花見頃は厚化粧も亦可なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(評)海川の風に吹かれる故、やはり薄ければ木地の出る氣遣ひ無い。その上に船遊山は兎角日に照られるもの、白粉が濃ければ却つて燒ける。

◉夏祭り其他練り物などに行く時の化粧は先づ白粉を厚う爲るがよし。首筋は鬢油をよく練りてすツかり磨り込み、さて灰汁の強き舞臺香をよく灰汁出し爲て日數の經たる白粉を手の平にて練り、眉刷毛にて延ばし、顏も亦眉の間より鼻口元の四方へ練り、練りたる鬢附けを篤と磨り込み、頰と目の際は塗らぬがよし。

(評)此時は着物が是非派手ゆゑ厚化粧いかにも宜しい。目の際をあまり塗ると目が小さく見え、蜻蛉も鯨か豚になる。

夏紅といふ物をとツくりと附け置き、顏は常の舞臺香の生白粉の灰汁を能く出して平し措きて塗り、その跡は眉刷毛の毛の拔けたるにて延ばし、能く扇ぎ冷まし、乾きたる時また眉刷毛にて宜しき白粉の粉を上塗りすべし。

(評)鏝ぬりにこれほど本艶を掛ければ入梅にもひゞの入る慮は無い。

紅を手の平につけ眉刷毛にて頰より目の端まで目尻までざツと延ばし眉を作るには、毛の先が切れたる極古筆がよし。新しき筆に磨り立ての墨を附けて眉を作る時は、むらが出來て思ふやうには引けぬもの故、これは秘密の傳授事なり。

(評)新らし筆は毛にまだ脂氣といふ煩腦が有る故兎角邪魔になる。毛までが燒き餅を燒くと見える。

さて又口紅は、きツぱりとかた紅を付けるが見得よし。赤面の金時、與勘平などの作りには、むき梅といふ物を藥屋にて買ひ求め、水に浸し置き、その水にて紅を溶けば紅もよく延び、第一むだの紅も入らず、その上おとすにも此水にて洗へばきツぱりと奇麗に落ちること妙なり。若し丑の時參りといふ如き物の顏の作りなれば、目の上下に藍を引くべし。

(評)もし寅の時まゐりならば毘沙門隈に彩るがよし。卯の時まゐりならば耳を長くすべし、辰の時まゐりならば角を生やすべし、巳の時まゐりならば舌を二又にすべし。

◉燈火に向かふ時の化粧は矢張り厚く塗り、しばらくして濡れ眉刷毛にてさツと撫でゝ、白粉と紅少し入れ、手の平にて溶き合はせて塗るべし。

(評)是ならば電燈に對してもあをざめては見えまい。その

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

かはり夕やけに逢ひたら紅の汁でも絞れさうに見えやう。

◉芝居見物、棧敷きなど高き場所へ行く時の化粧は最も氣の張る者にて、大勢の人々に下より見上げらるゝ事恥づかしきものなれば心得べし。總べて人の顏は上から見下ろすと下から見上げるときは、標致が餘程違ふて見ゆるもの也。何故とならば、下から見上げる時は鼻の穴が見ゆる故一割の損あり。

(評)損とは知つてもまさかに護謨の框も嵌められまいし、栓も入れられまい。何れにしても此所は工夫もの。

さて斯樣なる時の化粧は濃き白粉がよし。鬢付けをよく〳〵練りて鼻の際、鼻筋、腮までよく磨り込み、其跡へ粉白粉を眉刷毛にて鼻より咽喉まで粉のふきたる如くさッと刷き、首筋は常にてよし。

(評)御白粉を油でこてつける、それを稱して安部川流といふ。さも無ければ天麩羅流、まさに衣を掛けた譯。

普通の白粉にては人氣に壓され赤黑く見え、又役者の厚白粉に負けて此方の色が殊更黑く見ゆるものなり。額の白粉を濃くするは鼻低に見え、其上でぼちんに見ゆる恐れあれば、此心得忘るべからず。

○捕虜の護送を視る

無名子

十月十四日止み難き用あり郷里に赴かんとして宇品港に至る折から往來の旅客盤の如く筆者の如きも第一船に乗る能はず第二船も亦た定員に充ち第三船に乗らんとして不幸にも瀛鑵を損して五時間滯港する由につき遂に出發を止めて歸るに至りたり、かく數時間滯港する中生來未だ甞て見ざるの一事に遭遇し喜悲交至り遂に此に記するに至りたり之れ平讓の捕虜五百餘名が上陸及護送の實況なり。

之れを視むれば二列の縱隊九六組各若干の兵士に護せられて進む弊衣破袴或は短靴を着け或は長靴を穿つあり或は日本わらぢを着くるあり或は何者をも穿ざるあり多くは髮を斷ち亂髮蓬草の如く其肩にかゝる鬚髯は僅に延び躰軀甚く疲痩顔容枯槁蒼白として頭を垂れて進み身衣に積る數十日の汚垢に惡臭芬々として其狀眞に喪家の狗の如し、丈六尺に餘る偉漢が肩を聳し獰猛の徒が眼光閃々以て敵國に捕虜となりて猶ほ毅然濶歩する樣は憎しと云ふも愚なり唯斬頭の日を心に算し刑場に引るゝ思をなして打萎るゝ無數の無腸兒を見れば愍然たるの外はなく十五六才の少年が嘻々として笑顔恥るが如く時に人を見家を見電線を仰て行くを見れば可憐ならざるにはあらず、然れ共偉大の人威風堂々たるの人——恐くは中隊長ならん大隊長ならん或は聞が如くんば聯隊長ならん郵便電信局長ならん——之等の人が悄然として敵地に叱咤嘲罵の裡に身は一捕虜として進むを思へば憫然と云ふは無情の人のみ或は蓬々たる鬚髮は銀よりも白く腰は弓をなす老翁が衰痺疲勞せる老歩を引ずり惱むを見之をしも呼んで快哉と云ふ者あらんか之れ或は動物に近からんか其疲勞痛酷遂に堪へず路傍人馬の間に倒れ氣息俺々天を仰ひで怨を訟るが如き者を見ては仁愛の徒熱腸の人何んぞ爲に涙なきを得んや。

嗚呼彼等が天兵に抗し我邦義侠の軍に逆ふは元より憎みても猶餘りあり、昨日まで我を倭奴と呼び我を比して螻蟻せし徒が今や邦人嘲罵の裡に哭く必しも快ならざるにあらず、然れ共彼等は施政者にあらず命令者にあらず其我に銃を向け劍を交へし者只之れ上官の命のまゝのみ彼等は自ら事の是非を論ずべき者に非ず上命唯之れ順ひ一死只邦國の爲に盡せし者のみ忠魂義膽の邦民何んぞ爲に全情を寄せずして可ならんや然り彼等は實に吾人を倭奴と呼び螻蟻とす然れ共天兵已に勇に於て其優なるを示したり今や吾人をして宜しく又仁に於て義に於て更に優なる所あるを示さしめよ、顧に東洋之より愈々多事ならんとす若し夫れ他日東洋全躰の安危にかゝる事あらんか吾人實に之等の人を除ひて誰とか談せん不幸今回此隣邦と兵を交ゆ然れ共希は之によりて百年の仇を造る事なくして千年の知友を得んことを之眞に仁者の責任也

望むは義侠憂國の士が此忠實なる捕虜に全情を寄せられん事を、希くは世の仁慈の人士淑女が此愍むべき人々を顧み給はん事を。乞ふ思へ、彼等も亦人の子也彼等も亦其國の爲には忠勇なる兵士なり。然り、故里寒月空に高き所には征夫が敵地に哭くを知らずして窓下想夫歌を歌ふて衣砧をうつの妻あらん、俚門柳下に愛兒の還るを待つの母もあらん、爐邊粟粥値に熟するを知らずして空しく老嫗兒孫を集めて其父祖が老歩引きがたく敵地嘲罵の裡に呻吟するを知らずして空しく老翁の歸程を談する者あらん

嗟、此捕虜遂に仁人義士の眼中より洩るべき者に非す矣

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

◎曩には仁禮中將夫人　今は亦た樺山夫人、單身滯裝、赤十字社看護婦の制服を着して、廣島野戰病院に趣むく。

◎基督教主義各女學校　の學生中、ひそかに、赤十字社に申出でて、戰地看護にあたらんとを請ふもの多し。

◎また此等の女學生は　來月十日神田靑年會館に於て、連合女學校生徒の義捐バザアを開き、其の學暇に製作したる品を賣つて、收益を戰事用に献ぜんとす。

◎出戰者の家族を慰藉　すべし、更に好きは之に傳道すべしとの前號社說を讀み、横濱の無名子は書を寄せて曰く、該市恤兵會委員の資格をもて出戰者の家三百戶を手分けして訪問したるに、何れも貧賤なるを驚ろく計りなり、金錢上の救助は市町に於て其道なきにあらず、慰藉と傳道とは眞とにクリスチアンの最とも任ずべき所ろ也と。即はち、無名子は、大ひに此事に盡力せられつゝある也。更に勸む四方の諸君子、皆な常に此如く實行に勵なるべし。

◎大坂の照暗女學校は　西京に移りて新たに校舍を建築せし後ち、未だ開校せず。聞く所ろによれば、平安女學校と改稱し、來年四月より始業のよし。

◎伊豫松山の女學校は　非凡の熱心と献牲とによりて成立するもの也。曩に、年少赤熱の女子教育者櫻井彦一郎氏を、教頭として得、同氏亦た全力を擧げて從事せられつゝありしが、俄かに不得已の事故ありて同氏近日辭去せんとす、可最惜。

◎彼臺灣島すら宣教師　ジエル、マケイ氏二十二年來の傳道の結果により、タムスイに於て一女學校を成立せり。

◎大學入校請願の女生　を拒絶する國すらあるものを、近頃ろ米國女子大學中一二を爭そふバッサア大學へは男子靑年が入校を志願せり。左れど、憫れむべし拒絶されたり。必らずしも復讐的の意義にはあるまじけれど。

◎ウイラード女史すら　妾は如何にして自轉車乘りに熱せし乎の著述あるに至りし今日大流行の折柄とて、玆に初めて自轉車世界一週の女子を出せり。名は、メレー、ロンドンデルリー孃と云ふ。七月二十八日紐育を發す、一年中にて世界一週のつもり。

◎貧人の爲の少女團隊　は英語に"Little Sisters of the Poor"と云ふ。此は五十年前頃、僅かに年八十弗の給料にて生計する若き寺番が貧しき二人の――と一人の農家の姉人とに助けられて創立せしものなるが、今は合計二百五十ヶ處の救育所を維持し、玆にて老廢せる男女三万三千人を養なひつゝありとぞ。

◎歐洲諸國の結婚年齡　歐洲諸國に於て法律上認容の結婚年齡は國に依りて頗る異同あり即ち之を甄別すれば左の如し。

	男	女		男	女
墺地利	一四歳	一四歳	葡萄牙	一四歳	一二歳
獨逸	一八	一四	希臘	一四	一二
白耳義	一八	一五	露西亞	一八	一五
西班牙	一四	一二	羅馬尼	一八	一六
佛蘭西	一八	一五	伊太利	一八	一五

但し匈牙利に於ては人民の奉教如何に由り男は乃至十八歲、女は十二乃至十五歲を以て結婚年齡と定め又瑞西に於ては地方に由り男は十四乃至二十歲、女は十二乃至十七歲を以て結婚年齡と定めたり即ち歐洲文明國中結婚男女の最少年齡は男十四、女十二歲なりとす。

◎佐渡相川耶蘇教講義　所より岡山孤兒院へ向け、安息日學校生徒小兒の集めし郵便切手の寄附は直ちに轉送したり。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

俳諧史傳 全

和装美本定價三十錢郵税四錢

●小此木、布川兩氏の著『俳諧史傳』製本既成す、嘗て『城南評論』『評論』の紙上、多少の讀者をして其精細なる筆法に傾倒せしめたる兩三篇は、實に斯の書中の一部のみ。

●思ふに、俳諧は我文學史上に、一大特殊の光明を煥發し、三百年の間、庶民の美妙なる想念を漾蕩せしめ、豪宕なる漢詩、優婉なる和歌以外、別に、幽玄、閑寂、悲壯、沈痛なる詩天地に逍遙せり。

●俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞徳となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる壇林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、正風俳諧となり、平民的叙情短歌の面目を構成す。

●其源流に遡り、其發達を討ね、其推移を叙し、其變遷を記し、其特相を論じ、一讀の下、燦然として讀者の腦裡に斯の文學を活現せしむるものは、我『俳諧史傳』なり。

●これを分てば俳人個々の傳記となり、これを聯ぬれば、一篇整然たる文學史をなす。逸事ありて、以て興趣を横溢せしめ、名句ありて、以て一誦、天地の幽遠なる秘奥に冥合せしむるに足らむ。

●若しそれ、一字苟もせず、一筆輕々に下さず、言々證あり、句々據るところあり、而も文章、平易簡明、叙記、精到凱切なるや否やは、世の公論に一任せむのみ。世の俳諧を知らむとするの士、一本を座右に備へば、得るところ豈に鮮少ならむや。

發行所　東京神田表神保町六番地　女學雜誌社書店

田中登作　西村正三郎　序　奥山源三　編著

德川光圀

全一册　定價貳拾五錢

●朝鮮ノ來聘使ヲ難詰セシモノハ光圀ナリ

●終生外人ヲ震慴セシメシモノハ光圀ナリ

此偉人の傳記を序するに少時性行歷史施設老後の五綱目を以てし其間編者の管見感慨を略述せるものなり

教育書專賣所　東京神田柳原河岸十四號地　普及舍

山縣伯、大山伯、勝伯題辭、三上氏閲　泰東勝田孫彌君著

西郷隆盛傳

全五册

●第三巻發行

●第一巻再版

●第四巻十月卅日●第五巻十一月十五日出版●菊判大本●極美本●一冊金三十錢●全部前金壹圓貳十五錢●郵税一冊六錢宛●郵券代用一割增

本書の出るや各新聞は記事精確叙論公平希有の好著述と稱し又大に世の稱賛を得て第一巻は既に再版に至たり今や第三巻を出版す本巻は翁が軌軸となりて經營せし王政維新を精細に叙論して翁の本領を見るに足れり

●爲替振込は
●銀坐取扱所　東京市京橋區彌左衞門町五番地

西郷隆盛傳發行所　東光館

●販賣取次●東京本郷元、二一、岡島長英●銀坐博聞社●同尾張町東海堂●神田東京堂●銀坐育英書房

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(女學雜誌)第四百三號(明治廿五年三月十五日遞信省認可)明治廿七年十月廿七日發兌

鈴木弘恭大人講述

第六版 百人一首講義

(附錄小倉てびき)

御高評を得たる百人一首注文いよ／＼多く第五版品切に成りたれば茲に第六版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ／＼の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得る至極重寶なり。

正價金廿八錢
郵税四錢

透谷集

菊版美本肖像入凡二百七十頁
十月七日發賣定價三十八錢

右は故北村透谷子が遺稿斷篇の散逸せんとを惜みて一冊子となしたるものなり。子が轗軻窮愁の短生涯に於て筆にしたるものは悉く網羅蒐集したれば、子が平生の素志を惜む人はこの小集を愛讀せらるゝに吝ならざるべし。この冊子厭世詩家と女性の一文に始まりて蝶の歌に畢る、心機妙變の論あり、油地獄の評あり、歌念佛の評あり、三日の幻境あり、情熱の辭あり、哀詞の序あり、其他國民の思想を論し、富嶽の詩神を想ひ、情死をあはれみ、ゆきだをれを悲しみ、螢を歌ふ。其他清深の文字少なからず。

發賣所 神田表神保町六番地 **女學雜誌社書店**

新刊豫告

戲曲 桂五郎 魂迷月中刄

文壇の新才子阿波寺鳴門左衞門、數年の經營を一枝にもらし、茲に世上の知己に問はんと欲す。

一冊大本 六十頁物 定價十錢

高橋傳五郎 新發殉死人

千島の殉教者たる彼が日記、遺書、小冊子及び、押川巖本川合の諸氏が追悼の辭、皆一輯す。

一冊大本 三十頁物 定價五錢

論文 偉人物

山月子、熱愛高潔の筆を献げて、偉人物を説下す。言々人の肺腑に入る。曩に「評論」に掲げて愛讀の人太はだ多し。則はち、別に一冊子として便に供す。

一冊假綴 十六頁物 定價二錢

右三書來十一月十五日より發賣

女學雜誌社

本社移轉廣告

從來本社を王子村下十條に置きたれども、來る十一月一日より、再たび麴町區下六番町六番地に移す。雜誌の注文及び代價拂込は來月以后すべて當處に宛よ。

女學雜誌定價表

前金	
壹冊	金拾錢
拾貳冊(一年分)	金壹圓

廣告料及無料廣告

一行(廿七字詰)	一回	前金十錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半部增と定む。

發行所 東京府北豐島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治 印刷人 堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷(電話十九番)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY